俳人百家撰

へ 5
4399

へ5
4399

蘆舟堂
春仙莊

門 へ5
窺 4399
巻

昭和九年
九月二九日
購求

綠亭川柳輯

俳人百家撰

雄齋國運圖

嘉永乙卯新鐫
東都甘家堂梓

史俳諧の名ハ古今和歌集に出て世ゝに風骨清ゝたり
其芭蕉に連人を守武宗鑑を祖とし眞徳に式を定め
宗因に談林の一派をひこり芭蕉翁中興之志かゝりし
より黄きも謝きも俳を学ばざるハ稀く句集を演結
其砂の数を知らねど皆絶ハ必ず詠めて歌仙の色紙
懐し自ら稱しては百類の世情を尽しみより堅の春
結吟相高の秋乃ことゝ是ゝ結相のねもごろに世に傳へぬると
策諍するやその中に手法吟置てる説近くゝ見えるる風
調これ彼所集て重嚢に評をふれど玉の都出がゝ結篇ハ見ひさめ
和く只古を志のぶ心りて遂に俳人る撰とハなしぬ志結葉州の
のりそめどに似たれども宗云を吐て人を欺くやうにハ侮らしと
堂鍵の求に志ながら晃智者の眼にふると見えいけ家起重長さも
て遊びとなり稱んとしと法ぶりをも忌れて拙き筆を集ると志のり

嘉永八卯新年書

綠亭川柳

芭蕉庵の旧地ハ
深川六間堀要津
寺同所長慶寺ニ
古墳ありこれ佛頂
禪師現住の地にて
翁由縁の寺なり
古池の吟ハ今の
松平遠州侯の庭中
ニ存せる池ありこの
辺ニ昔庵の在ゝ
此句なり延宝の末
桃青伊賀の上野
を出て江戸ニ下り
鯉屋杉風家ニ入

後薙髪して素宣と
改又杉風より芭
蕉庵の号を譲請
て夫よりのち彼地ニ
庵を結ぶ此古池ハ
原杉風が籞にて
ありしぞ

古池や　まつ我
蛙飛こむ
水の音

應需
言魚緒墨
呂成

先哲叩俳

雛屋立圃筆

貞德

守武

宗鑑

貞室

宗因

芭蕉

玄魚模

芭蕉十哲

蕪村筆意

去來

許六

其角

丈草

嵐雪

野坡

越人

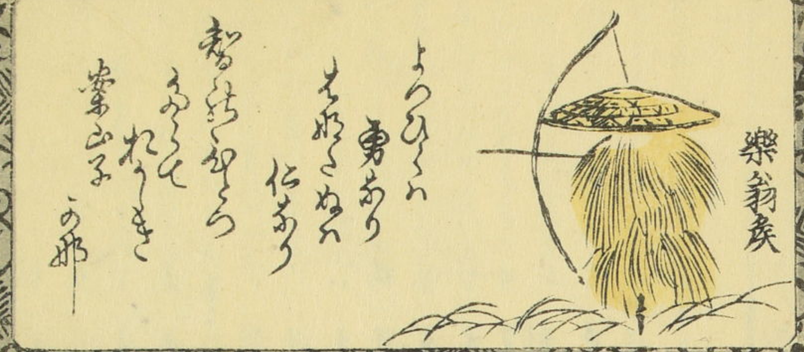
曾良

支考

北枝

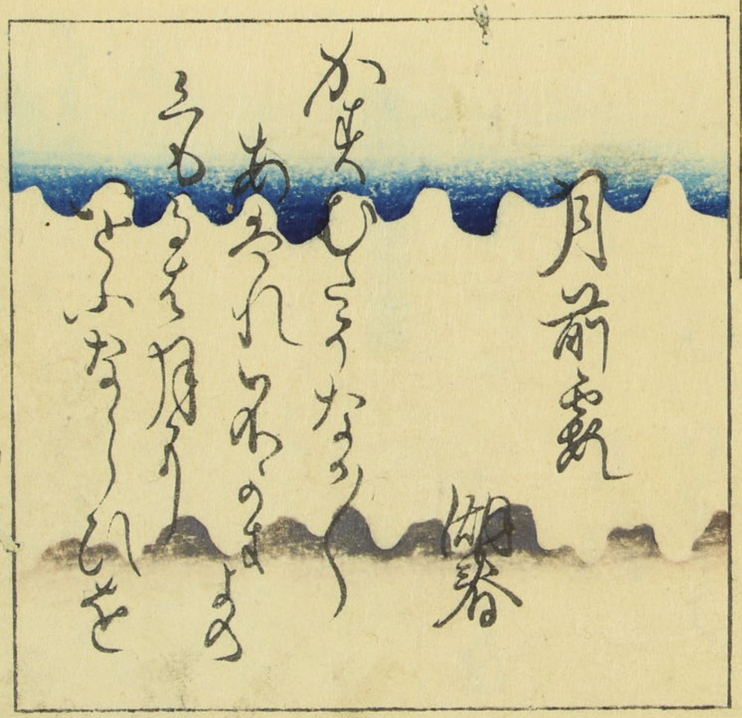
文化頃の歳旦の摺物に酒わの
ごとくそゝぎ給ひしと云
より万葉ごのみの古物の佐
保川の水をせんじ入て梅を
四てとのみかうき梅を
折うき折とよみ文ぢ人
のうたれぬれめといふ高
きのうたをよみて文ぢ
と業平朝臣のかれ
ぬと俗物のきは
なくそれ世くよおろ
ほうて山の葉うる想
夫婦うり見ぬうの誓の
子生そうな是を
教へ給はれ
とうえん

芭蕉翁



樂翁侯

よろひくさ
勇あり
まぬさぬき
仁あり
書ならべ
ふるくて
わすれき
業山ふ
の郎



月前雲

湖春

往古の發句体

[illegible]

職人盡發句競

番匠

[illegible]

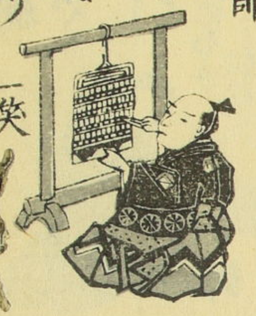
幣ふり

[illegible]

立甫

鎊師

[illegible]



一笑

五老井許六

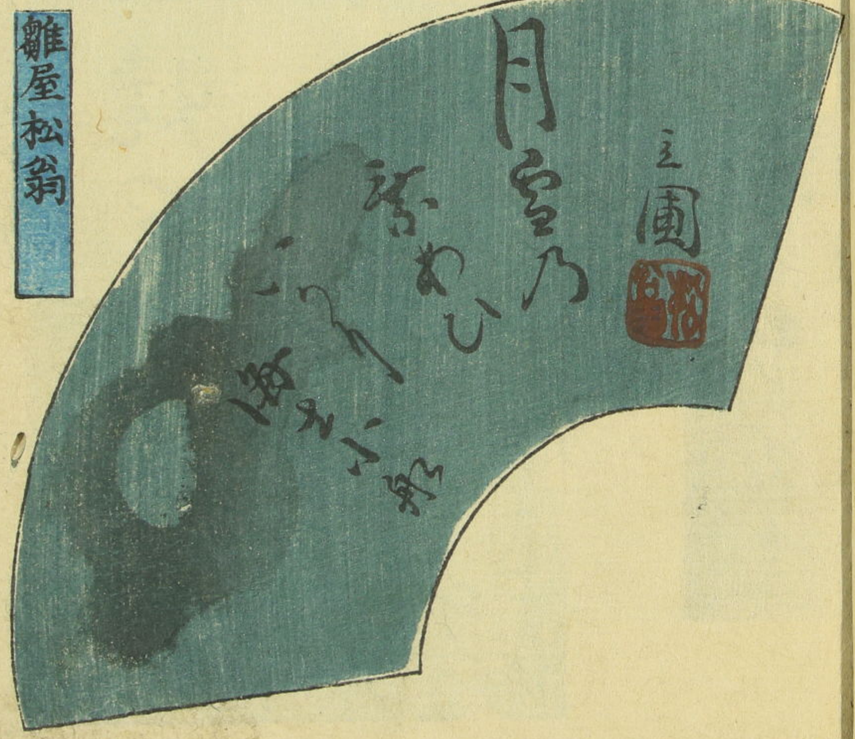
[illegible]

許六

東花房支考

[illegible]

雛屋松翁



笠縫

雪折や
むかしの
かつる
笠のあけ

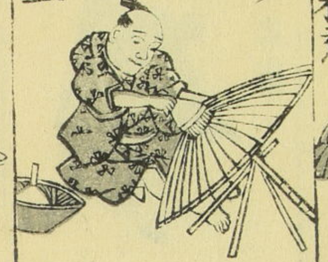
松意

傘

かきたりけ
眠り
胡蝶の
やどりかな

重五

粟田焼



きゝ菜の
かんり
日えれつ
井戸菜硫

一草

鍛冶

鬧しき
野かぢの
若くぬ
柳かれ

花兮

酒造

利牛

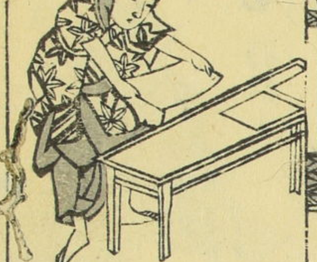
あらたあて
酒に名の
ゆつき
かれ

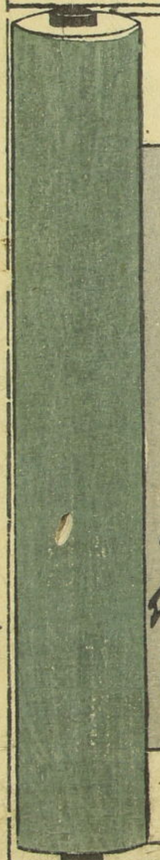
紙

ある袋の
もつくぶそ
して
紙子
かな
その女

宝晋齋

煙
開や
海を
よめい
金のうす





真角

大高氏

山をぬくかと

松の
子葉

松任素園

雪くしゆく
ひかれ
ひくれ
ねしの角

千代尼

其角が庵の後に尾花の生茂りしを苅人あり何思ひ二ツなるに文七とか元結これにて此所をその場にせんとあつらひけといへば其角詮さなく

文七は始まれる庵のかうがり此句後に思へば菅丞相江初年の時牛の子に傍に鞠牛の所を怪しみて牛の子にかまる程庵の始牛

法のありとても身をたつのこそ文七の句是は深案なりとて其角天神を信ずること深し其後旅行の比次の辺にて酒呑んとする家に入るに此所は濁酒まことにまさる酒は一里先へ行ばなしといへば其角

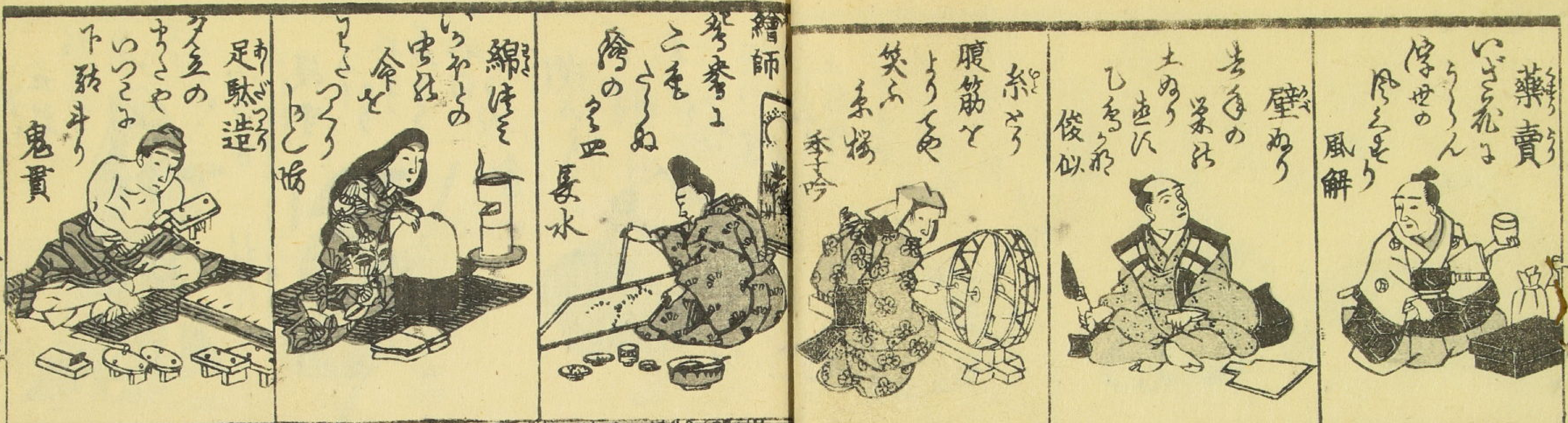
いまへり由はばあしまるものをトたちぶましは陸子のうちにて

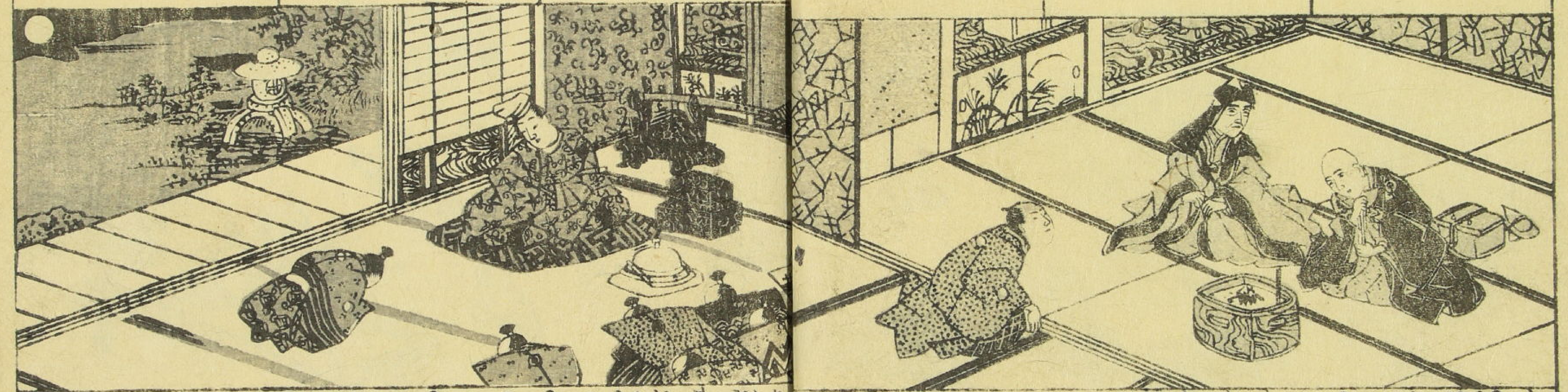
其角陸子を所でなんれば天神の像ありて人なし其神様なりとまに陸生涯伝ふせしとぞ

雨乞の仕方さまくありし唐土にくは小蛇二ツを毒に入るのく牧を持毒の外を打て唄ひ舞とひ伝ふ野及足利にては小野の篁の教へしとて田唄をうたひ盤珪禅師臼唄をうたひ近世にては其角が三めぐりの雨乞名なるく世に此へ行れど又正徳二年のなり四國にては一せう雨ふらぬ事本も拓果なんとする如へ陸及親書する坂本天神の社にて雨乞の俳諧奥行ありける時百花が發句に

神風の雨こを祭へ夏の来

これより次第に月句ありて百顔に満る時面ふり出し二日二夜ふり法きをも近左のうるおひとなり民の慈ひをもちひれば有まひ〳〵その徳をもあけることなん



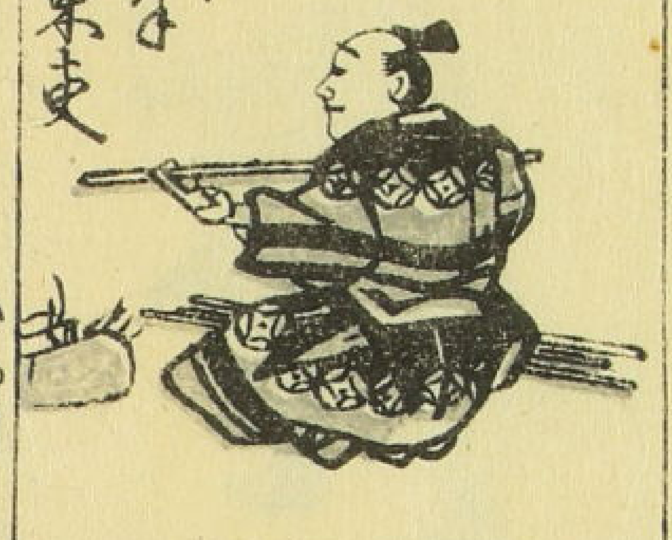


元禄のそのめ春かせとたつるや
いつとく江戸をたち芭蕉翁ハ旅
給ひせしに太白堂桃隣[illegible]
いつも伴ひて江の島に詣んとせしが
ハ翁流の歌よ寄るに旅店の女房
と夜食[illegible]に雪ようの中
[illegible]
の[illegible]二人の
[illegible]
桃隣[illegible]
[illegible]早速[illegible]
平産わりけれバ亭主悦び[illegible]
[illegible]
[illegible]と問ふに桃隣
とうへく
とく出て又ひのみせよ花の兄
翁これを賞て此ハ道を好ひ
かしこた君なりとぞ[illegible]
しんせしとるや

太閤秀吉公聚楽に月見の
宴ありて御前に曽呂利[illegible]
[illegible]家にある[illegible]
[illegible]庭へおりて[illegible]
[illegible]褒美よ
[illegible]われバ曽呂利[illegible]
[illegible]御座より
[illegible]上ゲ奉ると[illegible]
[illegible]
[illegible]御庭へ下
[illegible]曽呂利[illegible]
[illegible]
太閤[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]夜中の[illegible]望月
[illegible]
の刀をおくりしも[illegible]

立君
枯れて
女帝お
枝風
渡守
義きる
時旬
傘小
炭やき
無の一字
道味
木樵
紫うり
時旬の
義めうり
闇楯
鉢扣
許六
桶ゆひ
永機

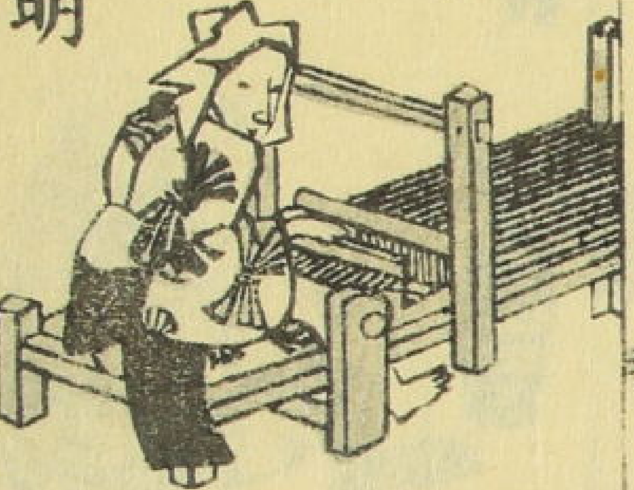
細代守
ゆふぐれや人の涛きゝ ゆうすゞみ（？）　云水

矢師
畔道を 曲りゆかしの 矢さきかな　東吏


据（？）
かゝき目につきて 花掛（？）　嵐雪
木造

饅頭売
咲暖し 香の 小春日　戈牛

籠作り
流るゝや 挹範（？）八 なへし山　瓢水

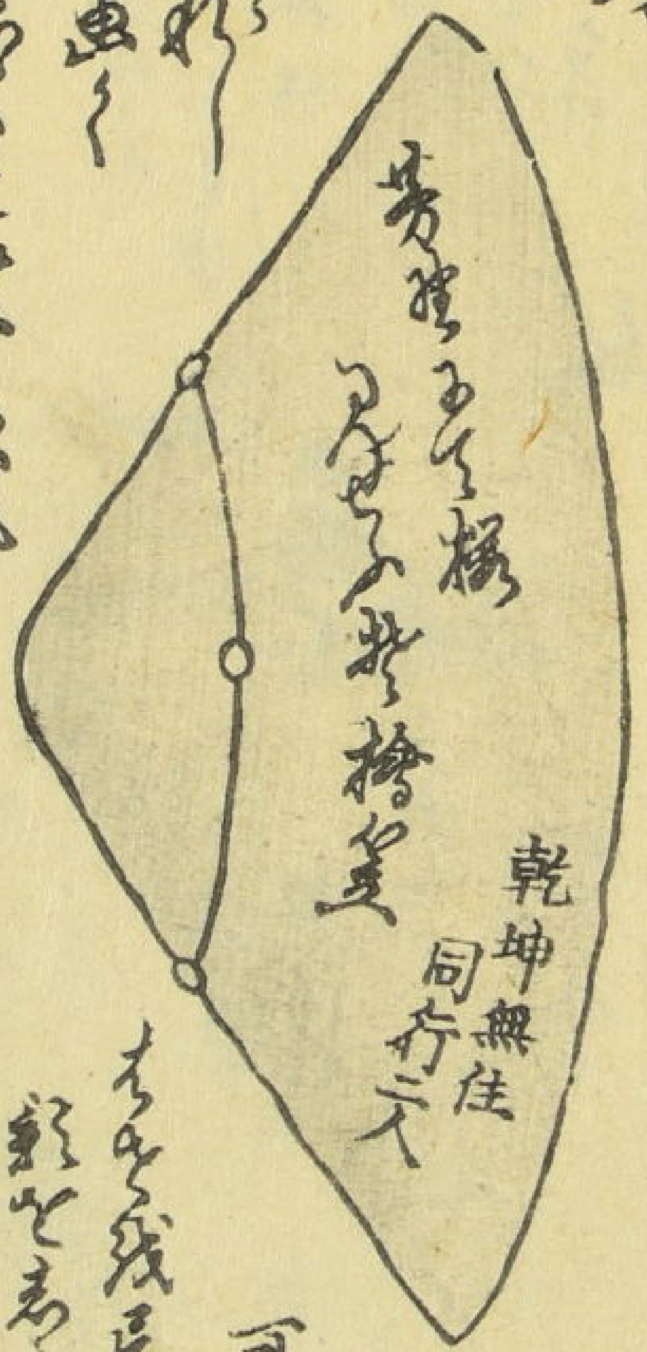
機織
はたおりや おのが（？） 半の軒　乙明


行状記云義仲寺に移して葬礼の義式をなし 京大坂大津膳所の連衆披官従者まで此の翁の情を慕へる にや招かざるに馳来る者三百余人なり 浄衣其外智月乙州が妻縫ふて着せ参らす 則義仲寺の直愚上人を導師として門前の少し引入たる所に葬る 木曽塚の右にならべて ［illegible］ 卵塔 ［illegible］ 柳 ［illegible］ 冬枯の ［illegible］ を植て各のかたみとなれり 畧

此下にかくねむるらん雪仏　嵐雪

笠塚

こびるれし 笠画く 志くしき笠　杜風（？）

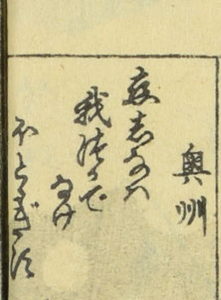


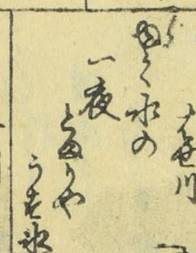
ちる花の銭見るや 彩色（？）あさらん 檜笠　可笑

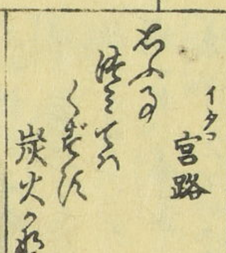
大和紀行に如月も半ばなる頃 杜国の我を導くに 枝折として吉野の花に名代にて ［illegible］ 彼の ［illegible］ 我と先の弟子と称りて道のたよりとも ［illegible］ 万菊丸と名をいひ ［illegible］ 笠に乾坤無住同行二人 ［illegible］ 伊良古崎 ［illegible］ 岩菊丸も ［illegible］ 檜笠を ［illegible］ 門人 ［illegible］ 吉野 ［illegible］ 一基の ［illegible］ 今笠塚と称せり

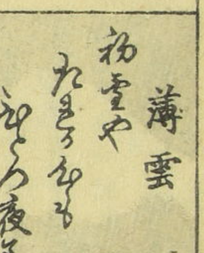
筆結
ぬぐふよく
拍らん
ものぞ
四方の春
竹妓

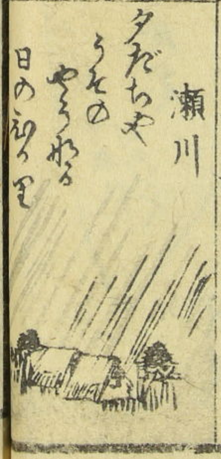
まき売り
撫子や
茨垣
おきそめて
うぐひす
越人











寺武山伊勢内宮の神官薗田氏
右中川平太光之の和歌遠
遠一世の中句前をよみ
ふさのけ庵別とるをせふこれを
伊勢論語と称せり千句の巻

乳母やめのと神の春
其時の初もの能
しやうぶ湯
風ふかせ平の如の花実を備
風流ふかしてもろ一向にくさ
なうくおもふ事共の好士の
かしこるのり附句の体い
共ようもなきちこもろけ号時
作ようも物つれなきに感のう
手ぬかなこもあやまりぬる梅の
なりもあんらく

落花枝ふるとうそれハ胡蝶れ
物ふれおろぐ雪のうつもる朽
天文十八年八月八日平ス七十七翁

心敬僧都ハ比叡山住心院住職く
ある時北野連歌の会ふ
人をおくりてかへる跡のまへ
身へいつゝ惜りの前ふのとろくえん
かく消られしを天満宮に感なり
て手ふ菓の大事を示の甚秘濃
の発ふを授けめしとくえされバ
後桃灯庵ふ僧都の住ふるを立
て惜りの宮といふ
ゆゑてそのふもみどりぞふのろ
とふ妹の浣きさ斗ふ凡つゑへて
ゑの上ふも世をぞいとへる
乱世の時ふ口ずいき死の有さまを
發句のさ夜一うと優あり
きぬふ見しむろやあくもく霧
花もみねたくれ涼き歳柴葉
柳ちりかりて寒きれ夕へ紅
月ふこひ月よゑつく都のれ
太神宮法楽千句ふ
月のさうげ花ふ見つるゝのさ葉

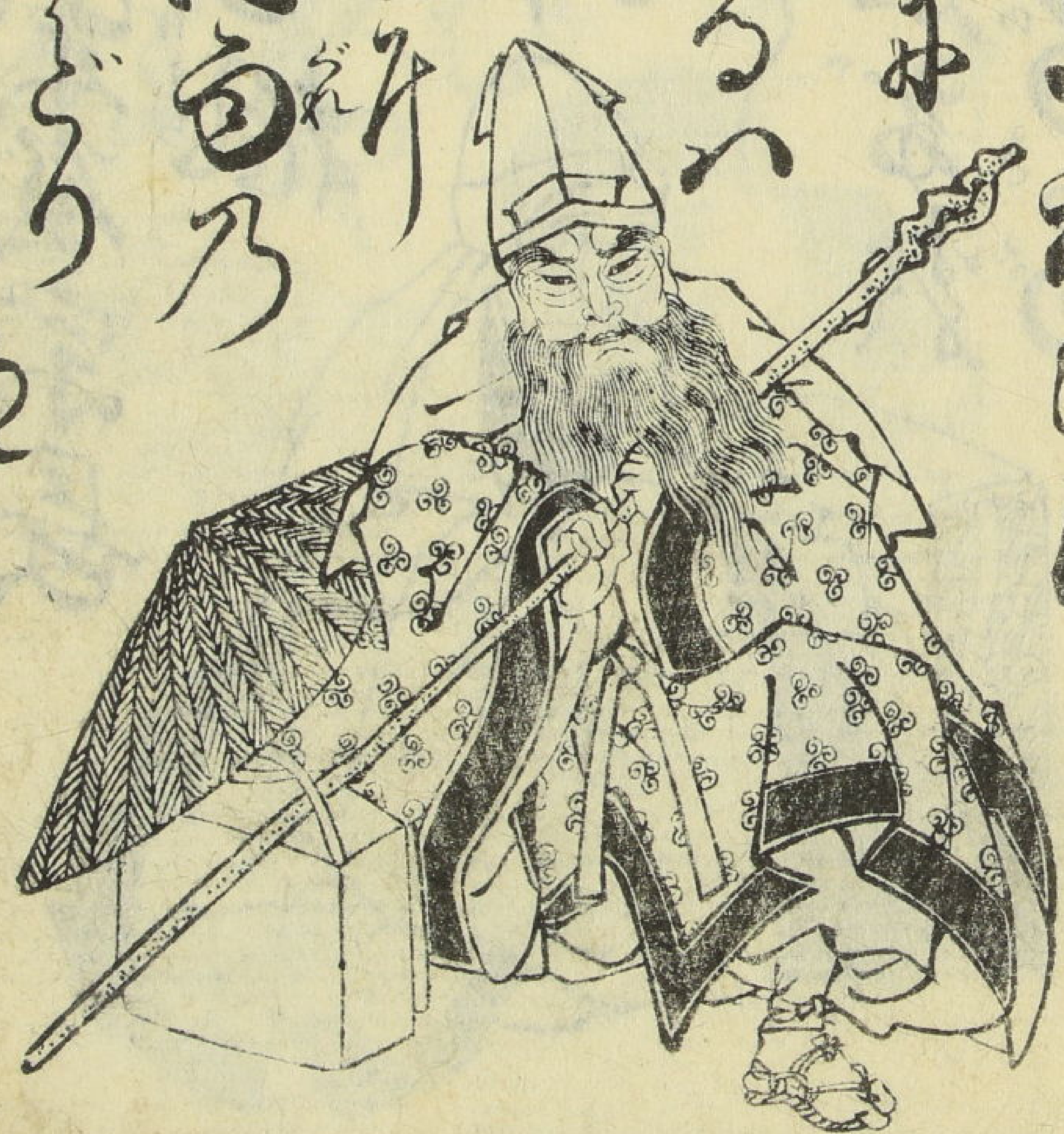
心敬僧都

ちる花の
音きく
ほと乃
み山
かな

宗祇ハ紀氏の畜ニて幼より風
月を友とし位の江の旧流を汲諸
國を旅行して富岳四海ふあそびあ
る秋名月のくもりけるふ
一とせの月を曇らん今宵かな
又のち名月の晴るゝふ
一とせの月をくもらせこよひかな
宮内ト問ふても心の闇ひを晴別の
ものあり又猪苗代の辛ふて堂の再
建ふかゝはりし連歌俳諧あり
宗祇ハ三とせ斗り都の庵を
出て連歌の名誉あらんと紙を取ひて
「あゝふしく造りたてる家の豊かト
こゝに懐紙ふかく一躰かんじける
ことばんと言つて宗祇
ゆ往先る侍者の志く
一躰宗の先ぬをとゞむる無へ上を
ふ二字の余りありけふさしぬへと
いひて退く文亀二年八十二ふて
駿河ふ早雲さる葬き

宗祇法師

世ふ
ふるハ
さらふ
時雨乃
やどり
かな



宗長は後孫四十の産之初少々
文学の成あまべ今川義忠君を
慰して仕ふ十八才の時宗祇に連歌
を学ふに一を学十を志る出家して
紫野に条禅し宗祇殁してのち
花の本宗匠たるべしとまゝめられど
辞して其合ぶやがて勅定ありて
雲頂たるべしと作りたる風雅の蓋
ん大徳寺建立に其殊庵を立る
に定家々の自筆の源氏物語を
賣拂ひて宗祇も其清志を賞
して今川家より秋葉丹後守安
元に命じて泉谷の地に居を構
ざしめ泉水筑山四時のながめを
居して遠ぶしめ紫屋軒と号せ
今の紫屋なるこれなり老に尺八を
ふくことを楽しみ連歌各蓋の
人なり享禄五年二月八十五にて
歩せ

青柏は奥平親王の遠孫にして早く
俗塵を出て青を好き五岳に於て
詩を作し和青は宗祇に学び生
ぬる時は年にのる角に金箔をなく
見るもの怪を笑へども自若たり
すゞめ嬰に従ひて拾ひ池田に居せ
四時の花を次第に拾ふ王を好む
せへに弄花の名あり永正七年の秋
希牡丹花を夢見て蓋實隆公
に命じて青柏を便殿に召して
此連歌あり蓋庵といふも是より
の名なり一とせ文月の比日でりして
民の苦むを見て是をあはれ
空に志るや雨をのぞき秋のくも
加く吟じて雪もなく雨ふり出し田畑
を開せしも幽めく青に徐周に町を
貴し鄙に其角が句をのゝ喝まゆ
青柏の面色を云ざるは本当なれ
王なり大永七年四月八日に卒ス
八十五歳

宗鑑は近江源氏佐々木義清が末孫にて支那弥三郎と号し足利義尚公に奉仕し将軍薨じてより剃髪して山及茅の寺に至て禅法を悟道し始メ連歌に心をゆゑ称しかど宗祇の上に立んことを難しと見極め俳諧の句を上つ手に遊宴院駅へ参るある時に牧溪茅菴より何人の歌にても上の句を吟じ民一句にて清く下の句あり

とそいふ所にむかしありけり

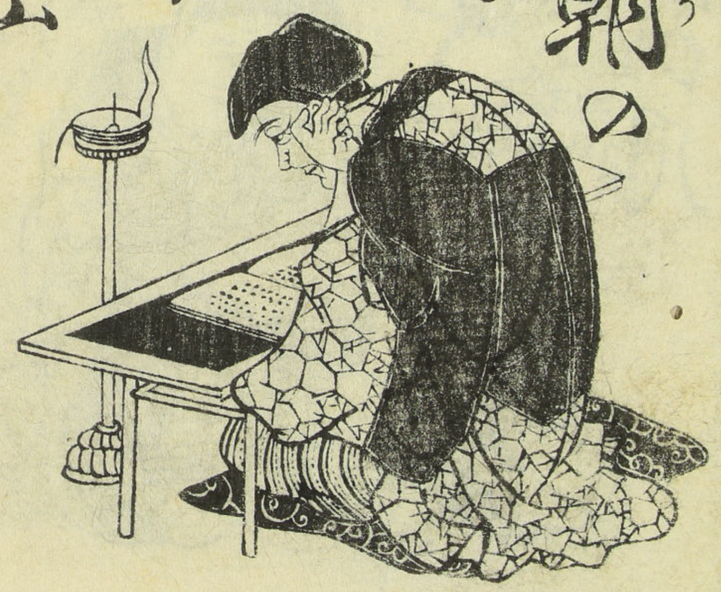
是を下に付まば何ゆうの上の句にも付んと宣へば宗鑑ゆて夫は上下の句ことあり我々これ等に考へれ

これにつけてもかみのあしさよ

是何の上の句にも相乗いたしきとかけり

手をついて云ひとる蛙ぢ

此時の句ありといふ天文八年


元朝の
ゆるもの
をん
富士
乃山
山濟宗鑑

僧上寺青蓮上人は暫道兼備の高僧ありあるとき人扇を出して何にても手跡を預ひけるに筆をとりて開けば三角三界を表しこゝめば一本一心を示すと前書し

「あふくよりの句をなりけりあま後徳を慕ふ者多くある時大流に向ひて我今日遷化するなり疑ふことあらば皆迷に出て決をなるべしと法のんを寄ひ既に時いたるとて

宿々天地清濁色
五妙境界浄刹臺
三悪火坑阿鼻底
一機不轉古今夏

斯頌を書筆を投山門に出堂を指けば炎然たる火車雲中に現れ其後上人のり移り大流にむらひ火宅まれ又もやいでし火車ののり得て又此ばかりにしてそかく吟じて飛さりなふといふ

音蓋上人
あふぐより
那にのり
招き扇の事

松永貞徳八逍遥軒と号しまた長頭丸とのふ和歌を幽斎法印に学びまた長嘯子を友とし高弟の名を得連歌俳諧の二物分て能ク究め発句の奉の免許せられ書を編し附合の式を定む長短の素懐を尽し紀ス

今宵こゝろも山となりぬべし
月待つ秋の山風

松永貞徳

末ふかき夜半の山風
人と我との外ふもあり
萩露も袂も風の宿ゆゑ
月ゆるすみの江の秋の夜
竜花さく世迄を兜の角をゆり
氷とみしもつゞれ織りけり

池をめぐりて

八十三才寛永二年十月五日卒ス

松永貞徳

なにはがた
みじかよの
ゆめばかりで
かひやなき
あしのふしの
ひとよゆゑ
みつのあまの
なをたてよとや

徳元ハ俗ニ斎藤ト称ス織田信長ニ仕ヘ秋庭利起と改ム慶長丙辰年ノ春ノ後ふ故郷ニ帰リ剃髪シテ徳元ト改ム

慶長十九年十一月廿日卒ス

春風に
まづ咲そむる
梅の花
匂ひを人の
折てこそしれ

徳元

徳元

冬木立
たれ松風を
まつ人ぞ
ふかき山路の
庵なるらん

徳元ハ彼是ふかゝわりて織田信雄ふ仕へ秋庭氏を改め利起と改ム慶長丙辰の春の後ふ故郷ニ帰リ剃髪シテ徳元と改ム

寛永二年十月廿日卒ス

夏のきてさうめんの時も
なりぬらんたのもの
時ぢくの程の隔ても
なき恋ぞうき
待友
霧きりかゝる庵の柱根の扉原て
丈れば人の風袖一度別みて
なにとなくそゞろ雪ふる物ゆゑし
まちこしてふる雪もいとゞ
ふかき夜の
獨琴手向をあらし
いまのちも名残ふ小埜ふ住ー又舟渡
ふ残り正保四年八月九日ふ
辞世
今はでゞ生きてよ
法名清巌院端甲蘭山と
ぢゃー天のそーらふ星山
智恩寺ふ葬ル

里村昌琢は連歌に名をなく雲上
へも聞こえ出し人にある會に
おちゆくかれのゆく人をしられぞ
行の子はのとより姉のあらはれてト
此つけまた嵯峨なりと世に云傳人
まさあるに會に
風もおくまは面もうらぶれ
とおしなべちらぬ花こそめでたけれト
附たりはれがある人なんじてこれは
ふしぎなり何日のむのさなりやと
いふに昌琢答て貴方の係も我係も
同じことなれどこれ処遠ひあり只人
同花の花斗見てあるなへ散せてし
我は只ことぞの花をみる者にちらぬ
心の花ことぞの花いづれも古歌に例
ありいふへの歌句に
おしめどのちるのうちなりけり
いつもみる心の花にさめなひてト
家祇の付たることなりといひければ
結めし人の[illegible]

昌程は昌琢の息男にて連歌にそ
の名をなし此白露の名古屋の職
に白露に横たはり水光ッて天
に接ると書し露の横たはる詞
殊にしく是を見て柳の枝につくり
このへたるは他妙なといへりある會に
いづくの山にかくも住らん
此付句に昌程
卯の花の咲ども多ぬ時雪
是を雪にて一座感じ既に執筆も
懐紙にかんと申し我父昌琢出て
まちつと案じてこれよりいひけり
人々如何のことにや此頃の秀逸に
といへば昌琢うかりをふりて定まらば
昌程志ばし考へて又卯の花のと五
文字を執筆にいたれば昌琢大ぐ
こそよけれといひけり
卯の花の散るとも多ぬ時雪
さきぞが昌琢二の句を雪の頃それこそと
いふ父といひ子といひ此道の名人へトさるス

玄札ハ伊勢山田より出て医師を
業とし俳諧ハ貞徳の門ニ入り後
一派をなせ生涯を慕ふ意地ふして
世事ニ疎くなりたゞうけの事を
を好ミ徳元爲友など同時の人也
探幽が富士の讃ニ
衣を着しところあり富士を雪で
四十二案の書
守りあへて（？）としくし十二神
香のあらそひくさのとんぼの花
ある時瘧を煩ひさしふ案の護も
きりしにふ病ふおりて獨吟百句ニ
知の花のおちる風のおとろへず
つき果績よせん事とさき
此吟ぎんの祈情とありしにや
瘧おちまち
落て病みをのがれ
風流の一徳いふべし
まことに世ミそして

季吟ハ江州野洲北村の産にて拾穂軒
と号し國学ニくはしく
食録若干あり家業を
そし万葉抄 八代集抄 枕草紙春
曙抄 源氏湖月抄 季をしめ
をくゝえる書物五十余部ニおよぶ
俳諧ハ貞徳の門より出るといへども
また一種の雅韻あり
富士の山師走とても
一僕とぼりくわたる花見かな
夢を擬して
後ふけさけるとふ門の松
名雲
地をかへて木の花の
信章江戸へ下る
いやの富士を目
哀傷
ひさびさを
八十二歳ニて宝永二年六月十五日
卒ス 池の

湖春ハ李吟の息男にて父の職を繼で歌学所となる能備ハ父義に出さり風調雅情あり桃書父のあとを志べく来ッて能備に及ぶ李吟真徒より居たれば口受秘説の書を桃書にあたへ相語り数刻に及ぶ時俄に迅風窓を打なる折から

あめつちの咄しとぎるゝ時雨が
發白雅少荒に傷れて迷懐に

さて歳の暮れかゝる夕のなる雨之名の附ぬ所なる西しゞさくらさつきや蓮に見られてゐる心日ところ氣の附ぬ松あり楊梅蕤牡丹せく人目や荒見えさくらゝ嫌かろしけれきる相一ツゝ那

西く年よ京へとなるハ此一ツ

元禄十年正月十五日父に八年先立て没ス五十四荒果院と号し

山岡元隣ハ荒法の医家にて能備を李吟の門に入り和学に明るくして徒然草後撰増補を著し長明方丈記所書なと書き能書を数多上梓して悠々強記の人なり中に宝蔵といふ西三ハ侍歌を以て調度の数文を作り雅に志て名家し

傘

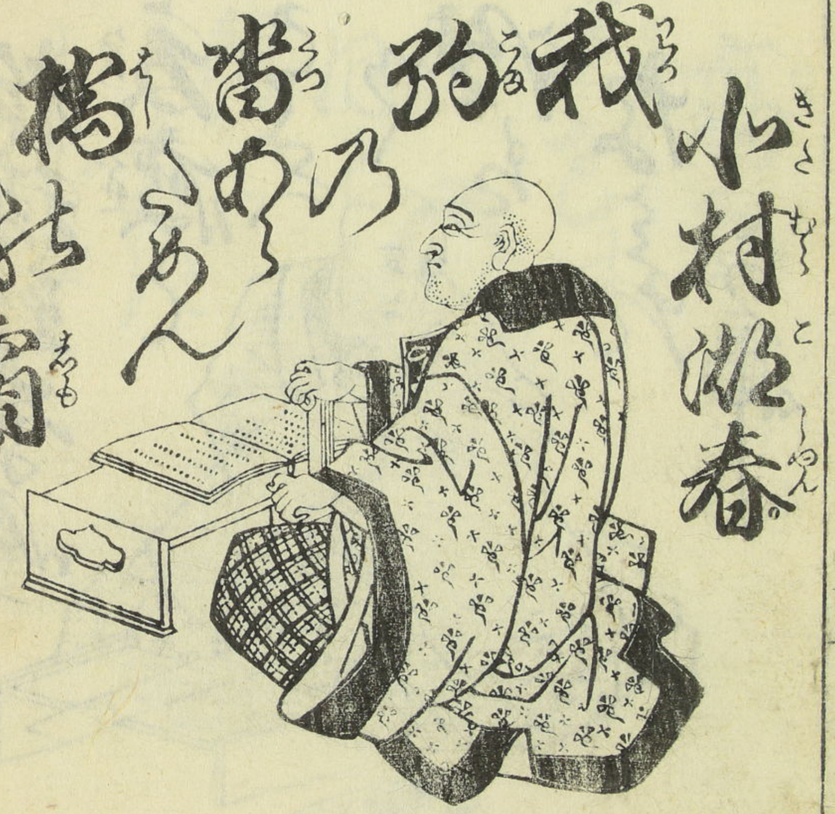
天にはるかしうさもうな花の面
忘ひそ大こく
令持や粉面白し月と荒

紙

ちハ為やことものを花の荒畑
十番盤
義用ハ志らぬうちなぞ老の数
たらぬ
月のうれあふに鹽こうそうの海

持仏

終に西く道つきなれやくぶり月



岡田将監は美濃大垣の士なり
此人左文右武の変えなく
に和哥を好こと雲上一筆道をこ
ゞ古人の調意を机上にならべ
和漢の殊を格ひその光をあき
らめ人も知り世にも銘ふ事りの
能事なりある夏都にのぞり
近傍殿へ四見舞に出るまゝ
五月雨によくこそきこれのもの
あそさしられは将監
あのへとのへをさがそ将きひ
抜をつけて中上られぞとの外に気
に叶ひ口祝にたきあるどなりおもひ
がけなれ幸ひにあひ誉れをとりしは
風雅の徳なりなり又行衛を泊て
世の雅傳を受く俳僧獨吟に
爪紅をさそや根の初紅葉
尾花の風に帰り袖の庵
月杖には踊きと人を催して

岡田将監
とりれ
よ
だ
月
見の
友や
荷の妻

杖田勾當至一は作勢山田平
住て名誉の盲人なり雅情深
く光に十二律の調子を受て物の
善悪を勢郷を得たりある時他の
家にいたり門の比霞を杖にて笑を
音の怪しきを悟りしたりて帰れり
その家に泥狂人あるて口傳の上夏傳
に及びしとありしに実に入ても盲
人の産うらん此難を通れしもまた
奇といふべし俳僧は守武家鑑の
風を志たひ幽妙をあらはせ
天神茅納の独吟
梅なりは雨の杖や北野殿
とぶ常のあとを老まつ
吉宗なる光りに鶴の羽を伸て
月にあとりをもとふ宮窓
秋風の次にくりたる古そぶれ
俳人三津女その女など此門より
出至一八十三歳にて
寛永七年卒

杖田望一
をく花乃
兄も
何に
わど
毛
可羅

梅翁宗因ハ西山堂豊一とて紀後
八代に住せしが加賀家にてありて
のち武門を遠ひ身を雲水の行方
に住せしを花月の縁にとゞめ一段
俳人に嵩居し又湖東に拓ぶ
又難波天満に張り正保のすゞめ
鶯の宿に遊まる住所をもとゝ
梅翁の名叶ひけるにや南校に花の
詞をひらき北窓に雪の力をそへ
て世に志らぬ人なく武陽にあり
俳諧の諸林をひらき年々盛に
してやどとなれ人も此門に入るある
夏東山より大坂へ帰るとて
夏山や或ハ師にあらず俳人船
安の歌やあつま此しに月ハ西
あるとしのくまに
くれ安しこんなことなら百とせも
その一歌明て元日
立安しこんなことなら百とせも

梅翁宗因

滾速
洋に
さく
夜乃
夜や
春れ花

田代松意ハ江戸神田の産なり
宗因を招き友と斗ひて始て江戸
諸林を立花鉢と号しその口調
変化の余情流行の体を現て
流人をすげまし俳書数多著
諸林百韻をすゞめ一字の働き
一句の情こまやかに教へられば世
間皆諸林風せぬ人すくなし
されハ実に諸林の本ゆり梅の花
世俗ねふりをさまさ号
和歌こそこの煙りよこられて
かる籠うき通る話の山風
詠むまゞ俳諧つゞく霧の雲
此ころ江戸に此諸林風をひろめ
ころハ此松意と体勢の正友
二人して力をあはせ
流人に道をさとし
東行の功を始とり正友も
雅情強く名を切しるあり
入相のうみ吹けぬ花もうれ

檀林軒松意

雪折や
むらし
かつる
笠れ
国称

重頼ハ花落の人俗称大文字屋
治右衛門後に維舟と号す貞門の
俳諧にて其名を人に志られ江戸に
号し後法橋に叙す毛吹草太子集
を撰ぜ諸林の比まで長き者も集
今拾遺を忍ぶみ生奨跋扈き性
にて同門の人々と俳を生し交り
を断るゆゑなり其風格
花に行心や鶯籠に相の樹
秋やけさ一と足に志るぬぐひ様
岑入や雲に紀伝も路中あり
料理あり残に夜なし旅も泊し
順礼の樹もうり曲く夜ぶり
ひぶんとて悲しく折せる花もふ
其後に曲きて
木綿帆やのうこし紀も雲の岩
阿蘭陀の文字が横とふ天津原
重頼七十四歳にて延宝八年
六月廿九日に歿す

来山ハ泉州堺の産にて蓑を触
一を求めて十を志るの蓑の人々
十萬堂と号して建吟にして
中葉諸林の翹楚之不可女人形を
求して我座右に置き紀左ニ紀ス

西行法師に服猫をゆひ給ふに門前の
童子におくれ通りしとかやいそぐこそ
あらぬ我ハ道にてやれ物の人形にあひ懐に去て最小遠ひ道ハ
机下に居て眠に悦びよハ机上に休せて寝覚の仇とも世を守れば
馬車の達磨など我堂にて科もなれ身を自服にあらるよりハ進
にまして人や物いはぬ笑ハ居ぬ後立ぬ情気せば蚤蚊の痛
を覚へぬいつまでも居住居を能さぬる事に待ふんとの人生ひ
流を去ぬ人ゆうけ是ど淋しげに物くるぬハよし自然のぬ後ハ
ゆる四時同じ歌賞なれと暑雪を志らぬ代方年のれるこさら
に過夏むかふに涼しく極るにんよく冬ハ燠の光を四るさ稲ハ
かげんにあらうん女の右に望まりして過を見ハ石が女に化せず此物
にもあらぬ千と世をふとも変せず此うこち風老が
の異後家さりとも気迷ひ男ハいづくの大江ぞや土所紙
志らぬあらうはるのいのせ物がたりや
おるすもる根のむやみるだり
来山

卜養ハ泉州堺の産にて牡丹花肖柏の末なり 始ハ俳諧を好びて慶友と号し医業に名顕れて人尊敬を得此の五十おりしころいかしへ於女地獄の住し高須といふも裏なれバ卜養狂哥に

南北のさかひなれどもふたつある
たゞ一つの穴をなりけり

又従よみ侍で

そのよしの木の名の月の府られ
ありけるものを家にぞうえし

晩年 台命によりて東都に召れ官禄を得りて鉄炮洲に屋敷地を拝領そされバ狂哥に

卜養ハ本道とこそ思ひしに
うき地をとるハ外科にぞあれ

卜養和学に通じ歌俳諧ともに長吟に妙なれバ口拍子卜養と人唱へり 後法眼に昇進して延宝七年七十七歳にて没せ

半井卜養

朝倉や木乃まるちぶの青山椒

西鶴ハ宗因の門下にして大坂俳林の一人なり 住吉社頭において独吟二万三千句を吐 是より世に二万堂二万翁と称せられ又松寿軒ともいへり 人国学に秀で文章妙を得 戯作に一代男小夜嵐を著はし大に行れ浄瑠璃の作者近松門左衛門も此門より出るといへれ 翁も奥行の時桃園より勝く来りて西鶴が草案をさめしといふ家上手の芸術人情を穿ちぬ一様の一風を示せバ貴賤して門下に入る者多し 葬骨も一きの目立て

平ざるやまなく生るゝ花見路
鯛ハ花ハ見ぬ里もありけふの月
ちよねに書かれし衣かな

元禄六年八月十五日五十二歳にて卒し 難波八丁目誓願寺に葬る

井原西鶴

大晦日さだめなき世乃さだめかな

大淀三千風ハ伊勢射和の者ニて十五歳より俳道ニこゝろざし日本行脚して年月を経へ国々の風俗を残さず俳諧の変化せるを諭し俳文を集めて附合の要を備し文風景眺望を添へし旅中の記を筆ニまかせて綴り懐日記横へし紙ハ六百余枚ニ及ぶ後是を梓ニ置て行脚文集といふ晩年相州大磯の浮世ニ移り西行上人の旧跡を再興し西行庵を立かゝる所ニ虎か石の木像を小堂ニおさめ鴫立沢と号し末代までの遺跡とし両部不禅を立て東往居士と称し行脚の門出四月四日なりしを命日の遺言なりと

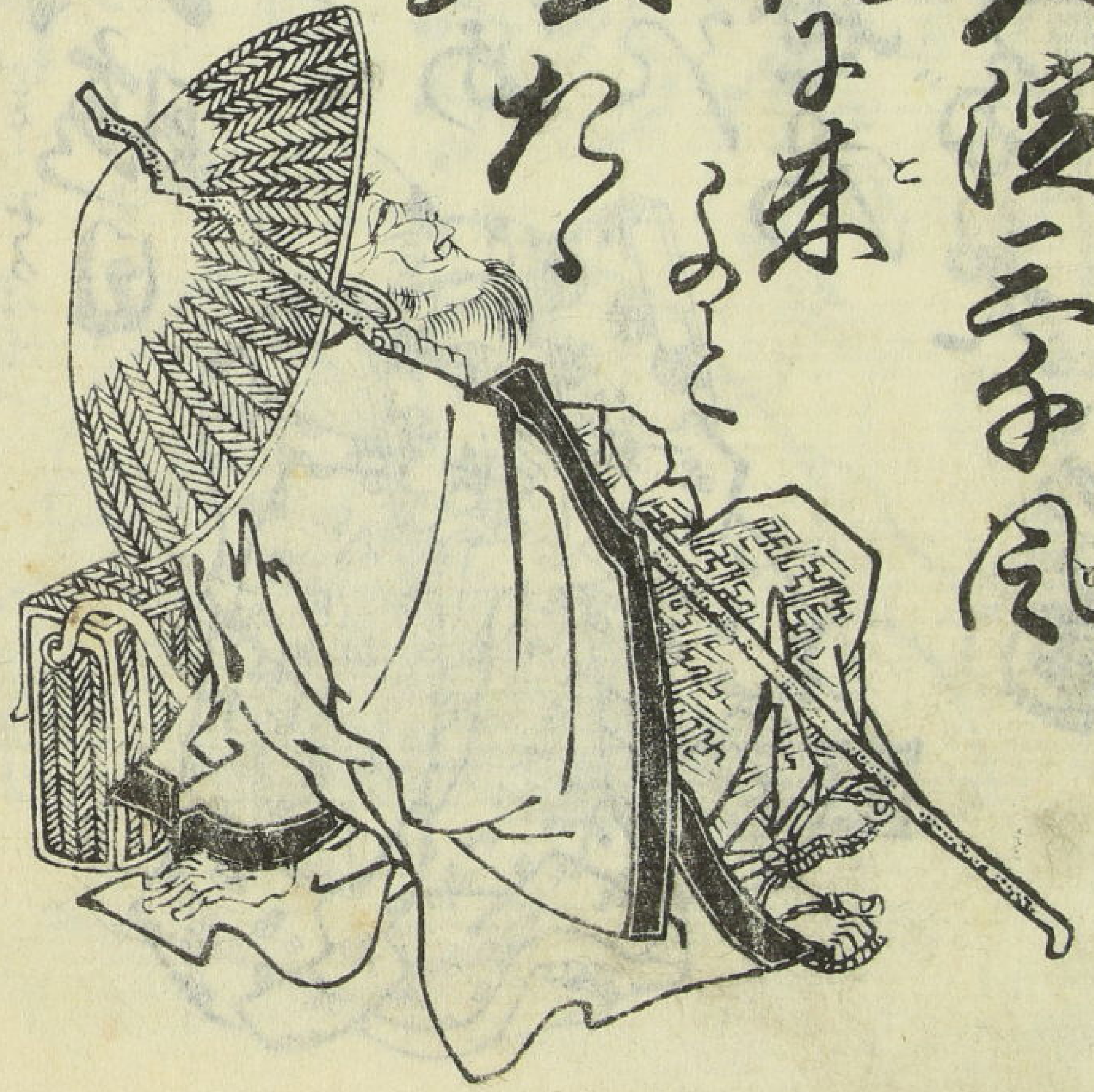
ゆふそれやかくれ世の旅の衣がへ

辞世

白拍以来か跡の宿の食迹を今ぞ又で床鎮かへあり

大淀三千風

花ニ来て笠おもたかる一葉の秋



安原貞室ハ一嚢軒と号し幼きより貞徳翁ニ仕へて廿余年斎材ありて俳談ニ達せる故ニ人尊敬して重頼ニ是を称して情ニて常ニ不和の色外ニ顕ハれ俳道免許を得し師の名ニ

丈長くちひさかむるや秋の月

貞室是ニ徒して

ぬらし見ちんの花の夜の雨

秀吟あまたの中ニ名高きハ

これハこれハとばかり花の吉野山

琵琶を抱て来諸ニ吟り

跡の月ハみよし秋の雲やふたの雪

武蔵ニあり隅田川ニ遊ひて

いざこの都を嫉の鮎喰ひに行る

人の家ニ泊りしを呼て

虫の音をやかしき涼しきる夕へかな

二世花の下と称し六十四歳延宝元年七月七日没洛よ寺相実寺ニ葬

安原貞室

涼しさの集りなれや夜半の月

三浦屋高尾ハ秋俳とも名へ入りて全盛のころ人の来る所と迄もよく此家の西の白東自徳のさうつきあり
此情を知らず或夜半に客着其の比の客は金銭を以て来りし此の仏事をせんと英治信者をかりうけ高尾が客を言ふさせて客おさへてかへると返しけるに高尾は其のあひへ来る其の言神もまんかの事としといへバ面白しと尾張とらへ事尾へ来る吉野をかくおせきし吉神も全盛なれへ今一度あはせてと也逢之夜手元政のあひを大坂新町の客高尾客をまつ新と尾張大坂へ神の紀高の室香で江戸へ下し高尾香て客へ出し吉野春で又江戸へ下し其の高尾香で客よさふらひ高銭投ふりとらへ或時らの客伏糀の画ふら紀て高尾よ贅せよとあれべからずそろぬ客とありし
おもしろくにぶられて庵ぞ萩の花

高尾

君ハ今駒かたあたり郭公

貞恕ハ新前鉄冀の者ふて重頼とのしつて烈丈深ふ修て貞室の門へ承又縁故の梅翁の福林ふさらう継て
待まうて人だくみせよ時雨
いづれの里もわすれ外の花ト
宗因附さりとてまある時のつけ合ふ
遠く出かけ冬れの彦人
といふ句ふ貞恕
道そらふゆきろ参るきの原
と附てより執名を大津の馬のくるそと呼れ逢坂山ふ俳宴をかまへ数十人の俗俳を集め禄国行術をし揆待まうけるふと云ふ貞室の門人毎のしといへども此風をめづるべき笑語熱ろふ成く灘くる所ありと元の宰府の画のりあるくましてそ風雅の本望といふべし
鳥ぞうやはやおとしてさそ秋のよ
七十歳ふ及ひ元禄十五年二月四日路長上の羽賞相寺ふ葬ス

乾貞恕

水草にいざさ花咲ぶ螢の都

惟中ハ備前の産ナレバ岡西一有又閑く堂ともいひ伊勢の電一ハ
能借をまなび能書にして和寿も
よくし沙金草紙續世名板を書あ
らはし宗周とも定り堂くあることに
土佐の信實が画し人丸の法景をも
とめて宗周の許にわたり出しかれバ
夫にそへて宗周前が死をして

學憲伝作のため
影向ありけるなるべん

お等の先母のくと窓の堂とい
宗周も頌るあめるる人之る俳
上えやわたしめて妻の月
とくちりて見る人ハ世山ざくら
とりとめぬ風もなくなり和氷
帯ぬるしいまご旅なる夜ごへ

除夜に
鬼をおふ綱公時に方相氏
五十四歳にて久保五年
八月十日歿也

野々口越前ハ俗称雛屋市兵湯
和歌をもよくし尊朝親王の書
法をうけ画もよくし京臺といふ
自画を用ひ書ひ草を著して
烏丸家の沙汰をもひ此本能士
が草となる意父の追号の時獨吟
九百吟を吐く生中に

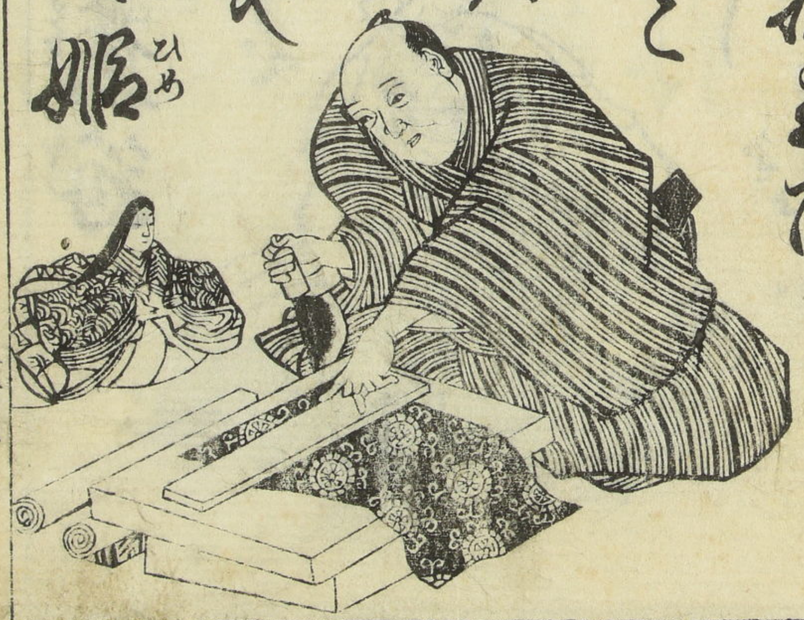
雪と消しあとの光りや弥陀如来
手向ぬる花や九品の浮土経
花桶の銘

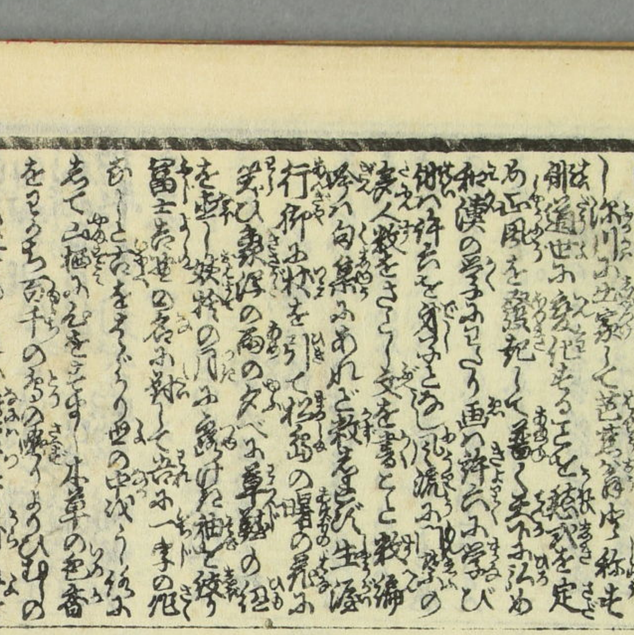
花といへバよし其我思ひ古其といへバ
其我の咲雪の花のひ出るよりいづれか
此名の本をへなるん昔されこゝる様
の種を植てよしの我妻の望なりけん
とありそのいれ君とかし

八幡のふるをな似せそ花の向
座にさへさぞな茂葉ハ東山
辞世

月花の三句目を分ける世ハ
寛文九年七十一歳にて歿也

雛屋立甫
山姥と
絡ハ
名
ハや
立田姫

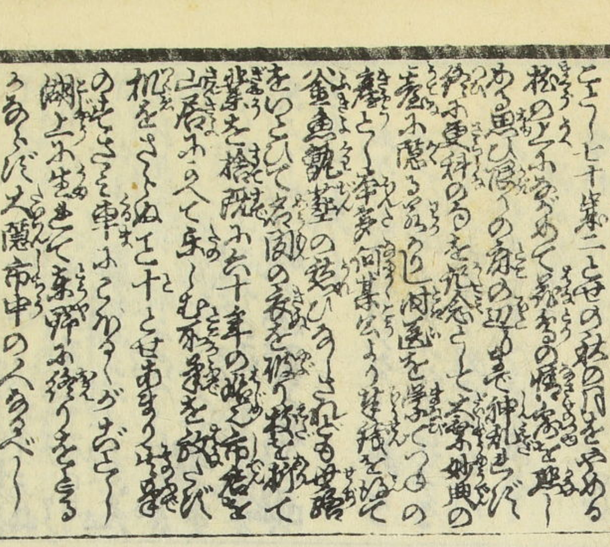




翁は伊賀の産にて壯年に官を辭して
江戸に在び風雅を業として桃青と号
し深川に出家して芭蕉翁と称せ
俳道世に変化せることを慈哉を定
め正風を發起して蕃く天下に弘め
和漢の学にはなり画は許六に学び
俳は許六を見ることなし弘流に
美人数をさとし文を書とと数編
吟は句集にあれど数を述べ生涯
行御に杖を引て松島の曙の晃に
笑ひ象潟の雨の夕べに草鞋の紐
を歪し妖怪の月に露けれ袖を絞り
富士者世の名に對して岩に一事の鬼
あしと古をさぐり世の中にうゑに
老て山栖に心をそまし本草の色香
をもとめ百千の鳥の囀りよりひむの
そう気をあそれみ難波津の浦に世を
見果元祿七年の初冬十二日五十一に
老て無府の客となり霊魂気仲る

芭蕉翁

物いつぞ
唐さむし
秋の風



東順は宝井其角が父に芭蕉翁の
書れし傳に老人東順は板氏にして
其祖は江戸堅田の士衍氏と稱
といふ者は晉子が母方によるものなし
とし七十餘二とせの秋の月をやめる
松の上にながめて晃なるの怪象を悲し
ある思ひ浸りの家の辺りまで伸れまゐ
終に更科の句を記念として大家妙典の
産に隠るゝ所に河邊を学てつゐの
産とし本夢何某公より建議をはて
釜魚甕墓の建ひなしされども世路
をいとひて名閑の表を彼り枝を折て
業を捨既に六十年の昭之市居を
山居にかへて来しむ不承を放ひ
机をさゝぬ二十とせあまり生涯
のせさゝを車にこゝろゝがおとし
湖上に生まれて東野に終りをとる
ゝあらば大隠市中の人なるべし

入る月の跡は机の四隅かな

俳中未明
とよりも
まだ
まぬ
ものや
年結れ

其の南の東順の息子にて極めて
悟らり医家の産れて能く
そのお玉が池の住し
宝井馬子 雷堂 善哉 竜の号
あり 待を大顧和尚に学び書を善
す 能く画を善くし 蝶の作へりけて
能くふ 画 風を しんで 蝶
多く 隅田川 竜 その号 天下に名を
轟かす 世に 蝶の利用と称して
る 秀号 多し

私が 老て 船に乗り 蝶を
次 女の 浦 と ろ ふ 何を 果 る
いっふ 稲を 千 潮や 大井川
名 所や 家 をめぐりて 家 戦 る
源氏の画ふ
傘持る月ふおくる 光 る
市山の 筵

寛 四年二月廿日 山十七 て 没 せ
二 市 坂 学 る 寺 ふ 葬 ス

隠士 楽堂 ハ ふ 漢の学 ふ よ く け
待 ち よ く せ 暮 ま よ り 酔 ま 吟 の 仏
ね て 達 く と れ と 吟 の 時 今 日
竜 信 事 と の し 山 八 百 籟 ふ 来 雪
と の ふ す せ 残 着 を 衣 と し と の ふ 乱
体 を 作 る と 文 を よ K 国 学 ふ 修 る
也 へ 白 机 も ま く 高 尚 風 特 る り

沈 ふ 船 ふ し 仮 名 ま る ふ 柳 か
葉 の 花 や 利 休 ふ 目 ふ 花 ま 山
年 も や ま る 流 ろ く 名 ス 川
ろ く ふ 因 ま る ふ の 月 も よ

深川 別 荘 ふ 蓮 池 を 作 り 友 を 集 て
晋 の 画 遠 が 蓮 社 ふ に し と り 郷
社 中 と の 人 も 是 よ り 始 て 芭 蕉 翁
日 比 ふ 家 集 の 風 体 を 慕 ら れ け
ふ 追 号 ふ 名 遠 を 継 し

おもれさや 財 ろ ふ の 山 家 某
七十五 ふ て 京 保 二 年 八 月 十 日 張 セ
感 慨 る 中 稽 る 院 ふ 葬 ス

嵐雪ハ拾及より出て紙屋職の者
といふ甚比江戸絵倉河岸に嵐丁と
いふ俳人あり此門に入て三年なと
まげみ勾案姉をあらそ先獲なく
嵐丁死去せしかハ生徒を徒て嵐
雪と号し自立の及ぶさる歳あり芭
蕉の門に入り少年に務るれハ生ゝ角
嵐雪ハ翁の左右の廻なりといふ不
白軒雲峯堂雪中庵木の号あ
里ある時人にこのまれて起出人と唐紙
を取よせひらかしに其ゆゑに故の死ある
が狭すれ有しに生紙に書付て
かゝの蚊唐の故諸人残喰て枕
のさくなくんよりハ夫人の帳にうつ
辺よりて意にやせて柳に似よ
唐の敗やはねに枯るゝ思ひ出
上京の時ふとん思ての吟ハ世に志ら
ぬものなく又義中る翁の塚まで
此下にかく眠るゝん雪なとけ

雪中庵嵐雪
黄菓志らきく
庵の名はなくもしが

丈草ハ尾張大山の古にて学問を好き
詩をよく作り徒母に孝ふかく才
に家を張りて母の心を慰んと石の
手の指に紙をつけ刀の柄掛り難き
と作り其門を編して緯ハ入り
松本山上にかくれ恒に法華経を
誦く嵐なりしと今ハ山やれりの
曲く曉のなきあなりし歳
此ところ歳
山やれりの紙帳の中の巨燭
故屋を出てまた薄さなりの月
此傍の寄し盃の絵に
花ハ盛りに月ハくまなきをのみ
みるものかハ酒ハ重ナ歳なくんをも
などこそ見て
思ひ立て歳るのふ事なり
又翁の庵中にも深切に看病志なく
うづくまる葉鏡の下の空ゝ風
のちに三年閏実志て外にいでゞ絵に
宝永元年二月廿四日卒ス四十四才

僧丈州
雪曇り
身のうつを
鳴く
かゝちう庵

去来は肥前の産にて向井は西部
といふ都に上り蕉門に入嵐雪と
羽翼の俳人にて文に名あり 晒
に翁の詞にも滑湯に去来宵て
熊西の俳諧を行なりといへり

落柿舎、制れ

一 我家の俳諧にあそぶべし
世の理窟を云べからず
一 雜魚蔬にはんぬあるべし
大いびれをうくべからず
一 粉をうたく精進とおもふべし
魚鳥を忌にはあらず
一 もしやうに灰吹を拾至し
こぞとをきらふにはあらず
一 薄うらせん猶待至し
火の用ふにはおよそ

右々謹々

去来五十三にして宝永元年
九月十日歿せ花落
直ハ堂に葬ス

嵐蘭はある武家に仕へるが故
宵て仕へを辞して浅草に寓居し
蕉門の俳に拓び鏡会に行き過路
に病て死せ芭蕉翁聞て涙を絶る
金草を得としてあへて少ゆま
さるは士の志なり文質編なら
ざる我もて君子のいさかしとす
松倉嵐蘭は我を骨にして
實を摸にし老荘を魂にかけ
て風雅を肺肝のるに拓そしむ
中略父のかく子のかく子のとく
足のかく年は云なれ面ひたる
俗の熱ひの夜にむまかしまして
拓も浮ぬべれだりなり兼我
敢て思ひをのべんとすれば知つて
なくいはんとすれば猶ふたがりて只
おしまづれにうりて夕部のくもに
むうふのを
秋風に折てかなり紀業の杖
元祿六年八月廿七日歿せ

浪化は京都東門跡の連枝にして
我中井波瑞泉寺の住職へ去来の
門に入一生の句を白扇集といふ文に
名あり満呂といふに坊主の説を書き
汝は満呂が汝が性のにぶきを餘を
研で小刀にし此の波をむくがわし
されば甘き物をもてむかば自然にむ
ける道理もあらん此のへに汝を書ふ
こゝに狙公が猿を養ふにことならば
茶を汲せれば冬の歌を汲あらし
幕をとれば春の日を掃えらせれば
竹田が人形ならんにも土計の限りは
あるにこそさるや汝が顔の漫々と
たて湯とも粥ともしられざれば生ぶ死を
辨となし生辨なるを用とする案がて
生成養ふといふべしとは東花坊に授せ
まで自然の鳴の鼻やそれ鐵路の事への
光りやまなるる但満呂の二字をもて
汝が顔の百福を称せば汝が心はあまた

井波浪化
春待や
机に
掛ふ
書れ
こゝち

支考は美濃の産にて初め彈室に
入て寄学の人なり能性傳れて芭蕉
に就しに翁庵中にも終業まで醜そひ
志ゆられて次の号へ立さむさうれ
翁歿後にも浩の双林寺に於両西行
と並て碑をたて自然を書せ
あつきあこ　むさしのゝ　名にしあふ
世代美濃の　さくらかつ　人にあらぬ
ありし世代　上のさくらな　数ありて
その五川の　こゝなるの　あの人ぞ
汲てしまし　六年ぞ書し　たてよこに
流まで其人に　ぬか川や　此世を霧の
をきて遊て　その陰のむ　そのさくに
いつ秋風の　やぶりけん　其名ありに
ときしをきぬ　其のうこ　人もいふぬ
身をなにすべの　まなとさく　花ぬさこの
夏そさめぬる
みの一流を起し東花坊西花坊まで
梅花弘の称あり後いせ山田に住して能書
享く能る享保十六年二月十日歿せ

東花坊支考
訣書
よりも
軍出
よみ
悲し
吉野山

許六ハ江州彦根の武士森川氏なり
五老井といひ又菊の佛と号し正風の
強雄に志て俳書数多撰ぜ芭蕉と
俳学の閑談をなし其業務を好ミ
風雅を発せんとなるにとゝ事あり給ハ
何の為好むや風雅の為このむ風雅ハ
何の為発せや画の為発せといへり
されば画ハ翁も師とし風雅ハ翁の
弟子となる特文を書こと流にもく
きたりある人の子入学の贄に
儒家何かしか獨子落に入て道を
学贄して曰のろこしに撤棒七年
の老といふハ純にして生し壽時ハ三年
に志て幅せる本にあり由此せべからんに
本箱にまづなる桐の[illegible]穿が
殘りまゝ鉤情あり
贄の箱ハ其云の時の見うたが
かんきんの[illegible]の蓋りなれ
山岡もこれ出る田うへの[illegible]

五老井許六
青
海苔も
和光の
華れ
[illegible]

捨女ハ丹波國柏原の里田氏の娘と
幼きより風雅をこのミ六才の時
雪の日や二ツ家くの下駄の跡
俳を季吟法印に学び生長すけ
れば國の守人府の砌り生家にたゞね
奇才を蓋なひて
柏原にれしや捨をく露の玉
中年まで風雅に於びて海漢学に
に心をなぐさめ時々の家を轉じ
て日々に情を家を変ひ一句分しし
ては風石のうちに玉を拾ひ泥中に
こがゆを拾ふる心地してよろこび後
舞をとりて男子をもち史記して此ハ
にたゞ盤桂禅師を師として尼となり
奥岡と号せ其居道のさま師の心に
ひ終に播州紀千乾川寺の傍に
庵を作り寂に住て
秋風の吹くるかゝに来折
んあそくもちるタヘよ邪

[illegible]女
栗の
[illegible]
や
[illegible]
[illegible]
[illegible]
女郎花

鬼貫は拾丹伊丹の産俗称と称す
右衛門檀花翁といひ性を平泉と号
始め俳を維舟に学び又宗因の門に入
先師松江翁と宗因列座の命に
一寸先も近きも遠し吉野山
といふ弟子に
徳にひきこ成さけてぶらく
[illegible]よりの山に飄その由へありやと
[illegible]鬼貫[illegible]せしが
よりの山花の盛りをさねとひて
ひさとさづさへ道こづりゆく
といふ古寄ありといひたり是俗なれ
ご答[illegible]力のたらぶく[illegible]
後一家をなして獨吟句[illegible]
家貧して資財とかく一女を[illegible]
の妻にもむる人あまでも義をなして
[illegible]七十八歳にて元文二八月
二日終に伊丹[illegible]
笑てりて[illegible]

智月尼は江戸大津の乙州の母にて
俳諧を好み乙州とともに俳諧につらなり
芭蕉翁の門人なり乙州江戸へ
ある時送りとて
つきとさへ人に行旅を富士の雪
まる嵐菊の死去せるをいたみて
明出して来こかしより稲もらぬ
殺句のさまあまり強のぶ余情あり
[illegible]
[illegible]
山様ちるや山川の水車
[illegible]
[illegible]
海山の[illegible]
稲のむこれを俳のしやげが
翁[illegible]の後義仲寺に集り[illegible]
法事の事に心を附追善の為花
を備へ我老衰をかこちて
我なりもあれにもあらず枯れが
宝永三年七十四歳にて役

牛吉は二代目豆助といふ下の農家久右衛門召抱の若えいなご十四才の時弓人射術を好み極に巻ごらを射る至るが牛吉仍弓を巻ごらと射るにその矢それて遠の田の畔なる鴨にあたり怪我の事名鴨を捕来れば主人も吃らば鴨を料りしてを辺の老をよび祝うなきまで啓してさらに牛吉はいあて二代牛吉主人の弓あるをたひねしがその翌日射あてたる田へ雌鴨来りて巣ゐしを牛吉あわれまふ名ひ主人にいふ妻をたひ娶せ切て道弘者となり的心と名をあらためむ村のかしまくに若の屋を結び後住の外他なりなく信をこらして実直に諸でこれ寄の秋里人に語てこれは此九月廿日物故せべしといひてその翔のごく病なくしてその日に死せ

辞世

はんれいしりやく伊吉の道をべ

豆助村牛吉

みるうち

しぐれ

目代

きよろん

せんむ

蓮の花

古家町松楽堂の瀬川は和歌を嗜み俳諧をよくせ花客と交宗宮何がしより瀬をおくりしける返事に

詠給ふ瀬川の風にしたされ雪の撫て見ぬ世せくことよの嬉戯をしらず此程に瀬こそひ女の袋まれ似ばとも雪のこのまゝ語ふくくしてどことをまひぶぬせとてうさうとしてあるかのうえへて一ぶし瀬の程とうぬきこのあふ旦とこそ人は家程酔てのことう思ひ盃と病枝屋さぬいんの礼まあしともうえいみるこふんとや清玄瀬のあくびかなまれ瀬のれどろく書きおうふまりてをちてなぶふまやせんとんくるしうちふ風もかきりて辨を辨をやめて恵び素くふうさもたのいとめのちがうぬうちさやしおろしてたれ

あげくまてくるれ

日にのりいかのぶり

入れ

瀬川

ひとの

いさみや

ふの月

しら坊ハ相州の産にて異風の道
人なり誹諧をよくしてまた乱舞
三味線にいたるまで上達して手に
舞ひ謡ひて狂ひあるく家業とせ
漂浪遊にありといへども久しく
冨士をみざるを残念におもひ
街道を小唄うたひつゝ下り駿府に
愛染院門前にて冨士を見ながら
辞世をよみて卒せ

五戒のこゝろを

殺生戒
いかほどの虫のいのちも罪作り

邪婬戒
猫よりも恥かしやのらふし

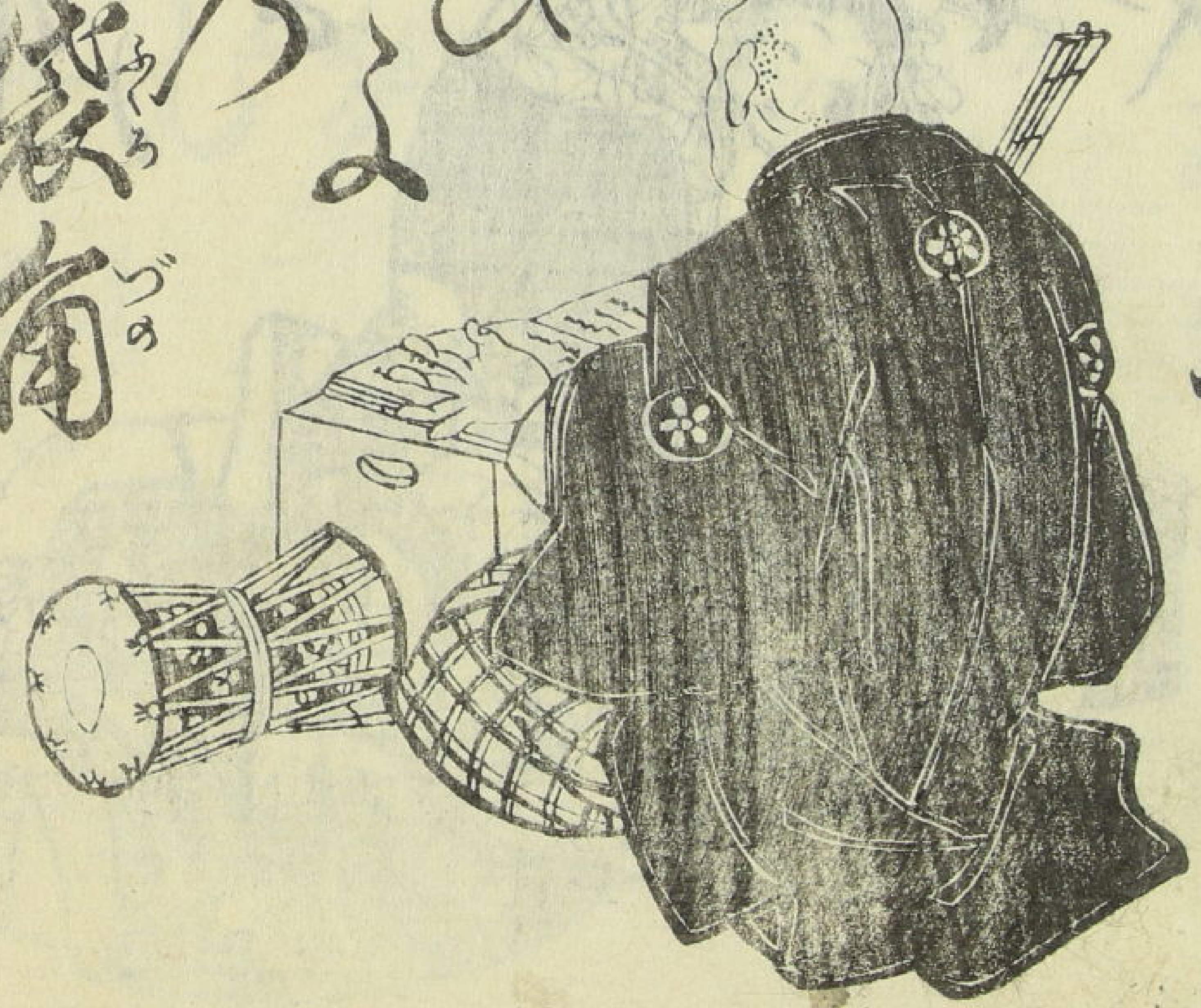
偸盗戒
拾ずに扨ぬしある風も種のから

妄語戒
ありきもの花を化せをまれ夫婦

飲酒戒
さゝの葉の乱れやそれや雨の音

しら坊

声そへぬおりひよ鹿乃袋角



百里ハ江戸小田原町の魚商人にて
仙風格風の幼稚の頃より芽生を
受く二十六年一日も誹諧に怠る事
一周常も一句も雑なり
一ツある家も枯野のへの字かな
こゝかしこ女の思ひかけつゝ
佃島に来て
雲のみねから扨りよせよ五月波
宝永の末ようやく火を治て
小松主のよろこびの遁の紀丸まで上下の
国浪の秀吟多し
蝸牛やをのれ蓋にて五月闇
松茸に機を入ても次テの夏
ある神やおのれまちまち書卒す
老いぬ火やまつ後の世に入る心
熊本にて俳友と交り団扇もて帰る
人よまる時京より役を来て餞別に
百里席で百里や風や凡る
享保十一年五月十一日六十二で死辞世
死でおのれで淋しき月をみるぞろし

うけがさき我ぞ悦べや生みゐる

高野百里

琴風ハ雞波の者なりしが江戸に来れ
舊門に拾ひ雞波して其角に従
女羅架と号し句を吐き達吟の名
をとり琴風百里と世に並べ称せら
るゝ翁の奥の細道をうらゆまゝく
思ひ享保八年二月松翁の人と
旅行の催しせしに浣水公より
汝が旅行の王立那にきこえ
たりて餞別のなちきるれ
つ給の年よりおもひあく
待そとよまて松しまの拘捨り
江戸紀友大勢せんべつの中にその女
弟の外に出しまつしを抑ず
百里も餞別に
みちのくや那若て帰れ道のるに
冠里公せんべつ
うしなきに其ま居帰れのもとゞるが
行琴風自筆に愛し享保十二
年二月七日終 押上墨慶ち薬辞世
一とせに此あらはひぞ其のれ

琴風
角にゆるみ
ゆるみや
精明の
新ぞうり

秋色ハ小堀丁兼子蚕の娘にて幼
名をあれとゆひ其角の門人十歳
の時上野の花にまかりて清水
観音堂のうしろ井の端にありし
大般若の様さうりなるをうんて
井のもとの様あぶなし此の辞
那口ぜさえはるに其頃の江戸至風
雅を嗜みなひ日々其の短冊をもとせ
甲乙を評じてなぐさみなふに此る秀
逸のよし称めの人是より秋色様と
世に云ありけり又あるとき武家へ召れ
江沼真の上秋色に種々たもれなふを
けけらふの紅葉にとりぐ女とは
秋色ハ風雅に名るものゝ多学化深く
其実慎世にゆへ其角も美分ゝ秋色
方に有しよし故に点印を附属せしと
之後秋色寒玉といふ者の妻となり
男女の子をもてり享保十年四月十九日
身まかりぬ辞世
見し夏のさめても色のうきのぞ

秋色
覗とり
早苗
ならぬ
女の那

言水は花浦の塵去れの門人にて
風下雪窓爰軒とも号し笑者を
四方に糧を言水あるとこれとくしの
まてはありけりといふるうらみて下の句
附かねて心いこめこれはうぜんとして
是をはくせにいひて狂人のことく衆も
うられありけしがある田舎にてうりけり
其の戸ありて蓑行の窓浅しく笑き
漢らかなる美人顔をなかばさし出し
ゐてありけるが言水とうしの吟を
云てたゞぜむありうらみ其人その下
の五文字は海の音とはやさしやせ
いのへける言水又はよろこびあいれんと
せしが声ざしてをとなし秋中女の住居
へいんもいうごと帰りて翌日こゝぬるに
其辺さらに家なしかしこれねど
未がしのまゝは有りけり海の音
さる披露とする人業して未枯の言水と
呼ばり享保四年九月廿四日死せ系
誠心院和泉式部塚のうてさらに其有

池雨言水
大吼く
家
人
鶯
もみぢ

千代は加賀松任のものにて初めより
雅才ありて俳諧を好き聟取のとれ
身を卑下して
沿うろの知らぬ柿の枝ちぎり
其に別れしは廿五歳の時なり
起て見つ落て見つ蝌の屋さが
男子に家を嗣しめ尾となり別に
住て雲園といふ画も呉俊明に学びて
妙なりある人画をとふ賛を下に書て
あはれと望しに知恵されたるに
知恵や地にさくことはあぶなりけり
ある人おりける女の見物を見へば取なして
一トかくあるも柳は女のきらひ
乙由方が安居を尊さる所のもしに
花さらぬ身は花のうなる柳かな
千代宮所のうへしのもしに
花さらぬ身は花ひよれ柳かな
永平寺の最老おとづ邑の人千代が
殺人一念三千の心を句に望めは
千なりや蔓一ト節の石より

千代女
鶴奥
法
なべ
なくれて
もしひ

能順は京都の社司にて連齋に達し名をなく元旦に大内へ召れて連歌の点をせしむ故宮を御賡感ありて有あふ御硯をなる時「けさ志るやの自を奉る」その後加賀大守の招きにあひて小松の梅松院に移りて住り折ふ芭蕉小國行脚して此居に至り止るに能順悦てもてなし雅詠数部におよび能順翁に問ひて連歌のさゞひ同にかくもやとんなるに

秋風は芒吹しくゆふへ風
秋風は芒うちちるタベ風

此二句を書て出せ翁もその博聞に法けがされれば

山さむし心の底や水の月

此句を出て出しれば能順さちまち奥意をさとり数日とゞめて能話に為ぶといへり

能順

今朝志るやの筆法あり

其の水

元兆は加賀金沢の人都に出医を業とし同種をこのみて蕉翁に志さゞひ猿蓑の撰に加せり其句作なつかふ情あり

上もくと下くる雲や秋の空
砂よけや蜑のうへの冬木立
灰もてく由梅うるむ垣根が
ひとりうけて藻の花のそく流が

禅寺の松の夜葉や秋無月

元兆不運にして罪ある人と兵り已もともに獄に法なれ窄内にて翌春いの志の首の法よさよ花の春うげろふの身にもゆるさぬ風うれ

那て身のあはしまて縲絏の苦をのがれ生法くがなれを人もよろこべ

骨柴の苅られなづくも木芽かかるまぎつまひにあひしを面ぶせに思ひ

五月雨に家なり捨てなめくがりかくよみもてくれ清志れば

なりぬいとおもむべれ人なり

元兆

おがのくと

川心と筋やゆれのたら

杉風ハ江戸小田原町鯉屋藤左衛門といふ魚問屋にて兄仙風と共に芭蕉翁の門に入り早く世を去れバ杉風家を継て頗る富るといへども上気の症にて耳かたく遠し桃青江戸に来りて甚遠行の思ひある時杉風とゞめて世の俳を見捨て山林に入風せんと仕給ふことむなしからずとおもひ閑をへ市中にも山林ありんや山中にも俗塵近づく所ありてもとより仏を学ぶの徒にあらざれバ市中に幽栖のぬさしからんと杉風日同小庵を見て年に東馬の喧噪をいとひ可なくんと借して杉風の別荘深川に至り家に住みに是ぞ芭蕉の名も起る杉風娘ひとり有て深く愛しけるが娘みまかりければ妻もろともなげきて
いさよひや我身にあきと月の鈴
八十余にして享保十七年六月十三日没ス

鯉屋杉風

ひる寝して手のうごきやむ団扇かな

越智越人ハ尾張名古屋の人蕉門の英傑なり上洛ほど家時の吟詠此人の上に立ものなしと翁日頃も思ひしとぞ翁行脚の同道をも出立んとせしがいまだ着に引るところ有けん遠慮のさまに見えければ翁も家によりて旅立れバ越人名ごりを惜しみ後悔して
うらやまし思ひ切る時猫の恋
越人上京して法華八講の寺に詣て女房の聴聞所とおぼしくて簾をたれし奥にて打ひて我女歳俳の事おもひ寄ける思ひあへる事なれバはろ／＼と落る涙やへびの玉翁の没後は先師の夏秋の俳あまた書を生して世の人を驚けるを耻けり不易流行といふ書をあらはし俳諧の詳に論ぜり俳道に於て実に深切の人なり

越人

散る時の心やすさよ芥子の花

生駒万子ハ加賀金沢の士にて世々家冨さかへ翁の俳を慕ひ入門志を通ぜし翁(?)国行脚の折り金沢へ立寄の節万子宅を尋ねらるに折あしく他行して逢ざるを悔みひとり裸馬に鞭をあてゝ跡を慕ひ漸く松任にて追つき餞別をおくりまさに秋の旅の資とし是を教へ風流のあらましを識て俳人を推せ(?)ぬのち江戸の許六を尋て対面をのぞむに許六癩瘡を煩ひ屏風を隔て人に逢ず万子俳友と語らんにいかで屏風をへだてんやと席にむひて酒盃を出し倚語数刻に及び帰るにかへらんとなれど相すゝめて慶も忘れざる風雅に厚く丈夫の人なり 口説(?)

汲ぐみ峰 尾上の松ハ明ぬなり

岩躑躅で一ト同くのそらかな(?)

生駒万子

蝶さえ(?)や すゞ(?)中の 茶屋に ふたつらく(?)

曾良ハ木曾福島上河合惣五郎といひしが後浪人して甲斐に住芭蕉に随て行脚を遊ぶある時翁を伴ひ梅林にいたり終日奥をのふし

梅白しきのふや鶴を盗まれし

など林和靖のおもかげをたちぶれて松ぶ(?)一ツの草家ありこゝら第宅(?)遊ぶを入れハ翁僅に留めて(?)

るすをまて梅さへよその垣根かな(?)

と笑ひけるに曾良もこれをうつして

痛む侍の庭そく梅のさかりかな(?)

又旅川に臭のあるを翁聞ひおよ(?)勝浦といふ魚ありといへぞ(?)

等ひあり氷きへて流津魚(?)

曾良翁の行脚のともなりしが道にて日々をわずらひ別れて(?)

ゆきゆきてたふれ伏とも萩の花(?)

翁の跡を慕ひてみ墓に詣ぬとぞ(?) 翁これを聞て行ぬ(?) 師を慕ふ心さしこれらにてもしらる

曾良

春に我(?)梅ハ 去(?)瀬乃 壹(?)

北枝ハ加賀今澤の研師にて俳法ハ芭蕉の門人なりしとも生城下火災あり北枝の家も類焼せり人々あまた訪ひきたりしに北枝平章にして

やけにけりされともたゞハちらに遠かく風雅の章情をあらはしけり

ちくて後又類火の為に焼れば俳友従者人先に走り来りて以前の章情いかゞといひたまふれ

のろともに灰も草もそこと成けぶりのうちに一つそもさん

北枝こゝえて

のろともに灰も草もそこと成

それとこの葉をかくあそなき

此時俳友集ひて焼る辞といふる葉出来たり後翁の塚に詣て

笠もそゝ塚をあくるや此時西文学風流北國に名ある北枝人なり

山川ぐ
山ぐ
花や
花の
雲

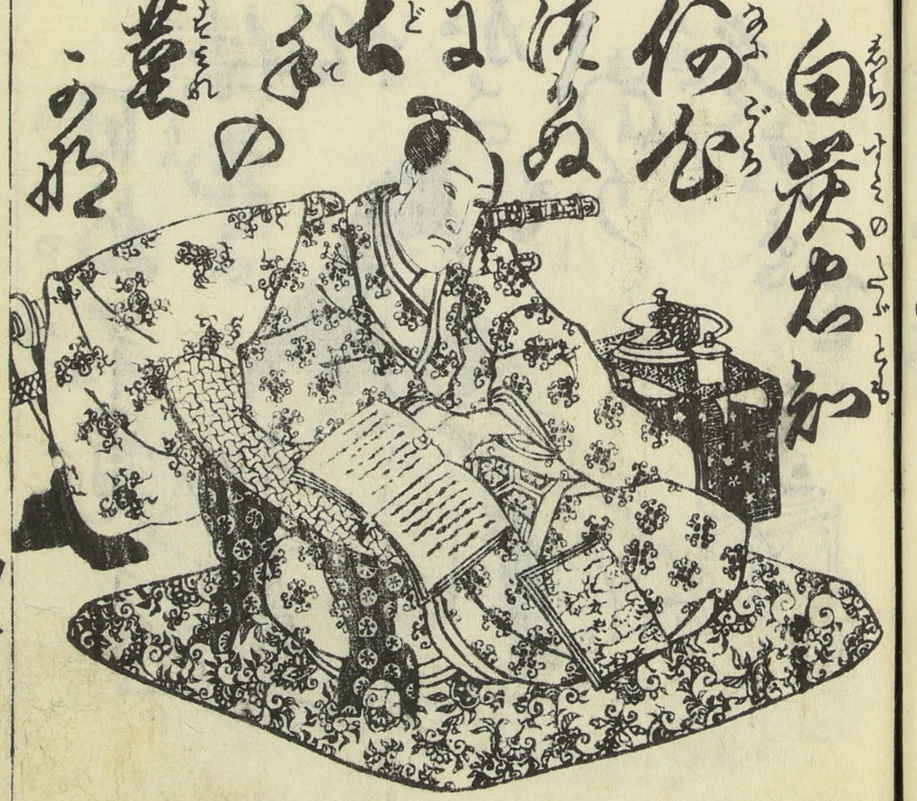
祚理忠勇ハ文武に名ある人にて俳諧ハ井坂基清に学び逆吟を養れあり

志ゝ岸や焼ぬむ色の雪の枝

此日より白炭の名物と世に称せらる行ひ正しくして四書を傍に置ざる時なし然れども不運に志て難あり俗者の為虚名をうけて塾居し身に曇りなければ迷に中被くハ安けれどかくてハ身の科を遁れんとて其君を暗愚に云なれば同じと一言の是非をもいふ罪を身にひきうけ復十文字に捨切て相果しハ建礼なる人也云傳へし

辞世

霜月にちるハなれ身のかげぞうらし


白炭右知
何ぞ
法ぬ
ま
ど
手の
葉
この枝

佛行坊不覚ハ比叡山無動寺の
僧にて四年に院を辞して坂本に
隠居して花法をこのゝ
周景和報の心を
怖しさる報ひに拘るかしが
故ひとつにかどとゞめる我身ゑ
生質花を好きけれハある時山法師
あく来て此坊の花をうる不覚の日
此花ちらぬ事ハ又も飛びあひ果見
と約せしが又の日皆行けるに茶屋
出来のゝにて終日物のもそなしもなく
夕方に空抜にありたるハうきて招ぎ
ゆくるゆへ物ぞもそなしも有べたるに
何もなしと法ぶ歩けバ花をきてさそ
ものにかくしき山法師の花かゝる花
をうしなかゝら猶絶さらぬ
喰物もとゝるとハたること
知らぬ心なり山王や大師の
冥加ハよもあらじと
戒めるハおりしかるべきなり

日枝不覚
俵抱
れ
かさも
あり
冬だも
里

演萩
うきく人
の
恥
りしき
火神
の

演萩ハ京都原難波屋与丹屋の
抱への妓女なりしが此家を比叡の
曲輪へ移るゆへなりて妓女十一人
連れたるに定くけるに演萩も其内
なるゆへ近き辺りにある父母を殺し
来ありしかんと悲しく父母をも伴ひ
てもらんことを願へど許さぬで客に
かくしひ殺しに彼ら孝心を感じ
途令を与へてあるゞに形をけれバ
贅をいとゞ形ハやとうけ引
けるに数て同道してもり演萩ハ風
雅に逃らぬ絃のんなれハ動の意
りもなく客も絶るなく此家おのづ
からさん昌志けれバ演萩が親にも
茶屋の口世なるに志つらぬ生しと病
萩も日々に安否を訪ひそ此孝
心世にかゝるしなりしが
後に[illegible]家へ根びきせられ
お親をも案備させたり
とき孝のめぐみんなり

大野秀和 西國の大守ゟ仕へ
武藝 武藝しげ郡山にありて
ゆくゝも武道を心がけ
ち怠慢ふして西刀を帯せり参ふ
年南あら方ゟ参ふ
年笑へるよ中云ふ
猪の牙ふきふいきごとく
打ふ西國の侍のよそふ
南ふ行あしれば
いろふ年を南何ぐ
年常ふ務負せよ
うけゝう其角
ゝう迷根ふ思ふ
ふるふんきるぐゝ
まちのくと
うちぐごんるれ
ゝて迷宮
けめと笑ひて

大野秀和

猪や〳〵

猪や〳〵

路通 路通の着ふて
年より
のあまう
ふ童ゝ

いやまろ
おそる
おゝを
消る
ひのくが
ゝて
ゝ

路通

本周は吳服六姫の人にて蕉翁旧識の俳諧にて吳氣羅を出かしこけ[illegible]に黄員ありける[illegible]の時本周が家にやどりて

かくれ家や月と菊とに田三反

本周悦びず餅をすゝめ[illegible]俳諧に風流の威光ありと感じて[illegible]侍り

侍る田をうしぼ[illegible]を[illegible]

[illegible]

死にもせぬ旅寐のうてやあけの雪

今しは雨をいづれは本周も[illegible]

舟にのりてかへりけり

秋のくれ[illegible]先くの[illegible]

[illegible]

[illegible]

妻に[illegible]

[illegible]

野宮厨に編ありれば[illegible]

[illegible]

曲翠は[illegible]の王[illegible]の[illegible]

馬[illegible]堂といひて蕉門の俳諧をよく

て世に[illegible]風調

[illegible]

本[illegible]きの[illegible]

馬[illegible]る[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

本周坊

旅人や

伯り

合をて

ふ波の月

曲翠

念入れく

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

大高源吾俳号ハ子葉といひて文武にかしこく其行状ハ世の人の知る所なり俳諧ハ水間沾徳の門に入風調殊に恰あり
日ごろ平生ていざ菜はまつ山椒
折柄良江戸の宰子ハ四季の行事もよく志て山田宗徧と交り諸流の席へ出て世の風流をきく手段惜死の船をこしらへかんとんを解き然るをやつし煤掃竹をうり我あの方を終日廻り西国様子なぞ見角にあつ大高が業を見て城をさぐる世源吾かくこまのあく其公にありまでれる世渡りといへハ其角もあはれに思ひ
年の尾や水の流れも人の身も
といひけるに大高
あした待るゝ宝船
その翌日討入本望をとげ名を末代にかゞやかしぬ

春帆ハ冨森助右衛門正因と号す浅野の義士にて浪人の後大炊の知己の方に居て母に仕へ孝心深く士と東国へ下る折から母にいとまを告げるに母も悟りたるとひへど色にもあらはさず たゞ一つの判を見れど老の身ハ案外色と小袖一つ送りしと其ハ給らご寝所とききされど見まもりて別れべしと惜みのある事にありし物語きて涙のことぞ実に人の別をそのちの母ハ自害も冨森は本望を遂げるに至る年顔の節に預けて人に別れて勇猛をあらはしその後は預けとなりても身を慎み翌年二月切腹なしつれむね御沙汰されけるが時にて感涙を流し母は四月の命日なれど憐て
先年母の日を
つねの旅路の思ひ出にして
春帆年齢三十四才なり

桃隣は伊賀の上野にて蕉翁の門子之年ゆゑにて仕へを辞し俳に於ひ江戸に帰り太白堂桃隣と云ふ箱の奥の田道を慕ひ元祿九年陸奥に於て前途に仕國まで花に呼出せ貴孤花鶴宮天茶にて

鬼の血とゆふその土の時ぢが土浦にて

土うらぶ花や手まとる鉄波山汲む船の網に出るし横川

日光山にて

雲ゑやうせまね瀧のうら表紀行をむつ千鳥と呼し雲堂の波なり桃翁感泉の路客の相伴に呼ばれ一ト曰くに手拭を拭に於て手拭ありしを盗て帰り一夜日を経て礼ふこのれくに

うへるさに手拭ぬせも異さなり

享保四年十二月九日死

太白堂桃隣

あらもらや

霞もわちぐ

水の色

野坡

葉がくれ

見てもあさがれ

鶴鳥乃

浮世かな

野坡は越の福井の高家なれど稀の江戸に住淡大阪に上り雅諧附合此人の上に出る者なし家貧しくある取盗人見び入りしが野坡城に向て折角の人来に時長柄あしく一物の財へなし只茶一斤とての人無りこよひは別なく寒むされは頻に迷ひくべんよく出して過きしといへば城らなつれ家うしこ係つく机上の孫茶に草庵の老火を通れおと茶ゆしして

我庵の様もまひし煙り先

花をまんつけ果火のとき城間に年和ぐのよしを答けれはさあらば同あの

一番句になるやとゆへも野坡

地くらる雀ならなく雪の狐盗人にして雅諧師は大笑なりのと大に感じ持たる物をのこらず遣て行なるとなん老淡言詠に往て高津翁と称せ

秋の坊

秋の坊へ加及の士なり後法祥して
花歴し湖南の幻住庵に彷ひ来
まへ慧翁とゞめて
我扁ハ敷のちいさきを就きが
秋の坊も遊世の好なれバ世の無常
孔速のことなどねんごろに拙がたり
やがて死ぬけしきハ見へ候様の夢
覚をのこして秋にかへり雪冬雪
動くふり来ぜく求れるに三長一弾
の外寒窓を志のぐる隠なし後
万子の侍ハ岸をこゝろとて
さむしまさバ山より下をとゞ戸の
もはうち若ふ人ぞこひし
これ炭の字を嵌してよみしし
清貧にして世捨人ハ死後に来残
の侍るハ見苦……とかり正月四日
卿友李来来りて花ハ秋の坊曰今
後吾暦を見ぬ事ハ
正月四日よろづ此世を去に
此ゆを吟しつゝぶひて死ス

秋の坊

漆けばいつれなぐら笹乃風

牧童

牧童ハ加及金沢の研師北枝が兄
に支考が出し侍を抄墨をしるに書
ハ梅翁の風流を志ひ中比芭蕉
の門に入て肉の風雅に拙へる心の二人
とも同じからぬことへバ一つ栗に蛇立
ぬる為の彼ハ梅の清きに勅り是ハ
外の志の曇れるに拙へる同じからぬ
ざるハ牛しむ心の呉なれバなり吟席
支命此人をしたゞけといふ人なし肉居眠
をもて生涯の得物と世りある肉も
梱干の苑にそむきある肉ハ樓外
の為を安ながら眠る下畧
為他も具あり
蚊柱のきえかのくとみうの月
けいたくを申して寒暑
浪辺のどこへくとぬくめる
生質拙稚をあらそれ富貴我を
くらやまの風雅に温順
あまいおのぞくらに雅人の
撓ともいふ人あり

梯元

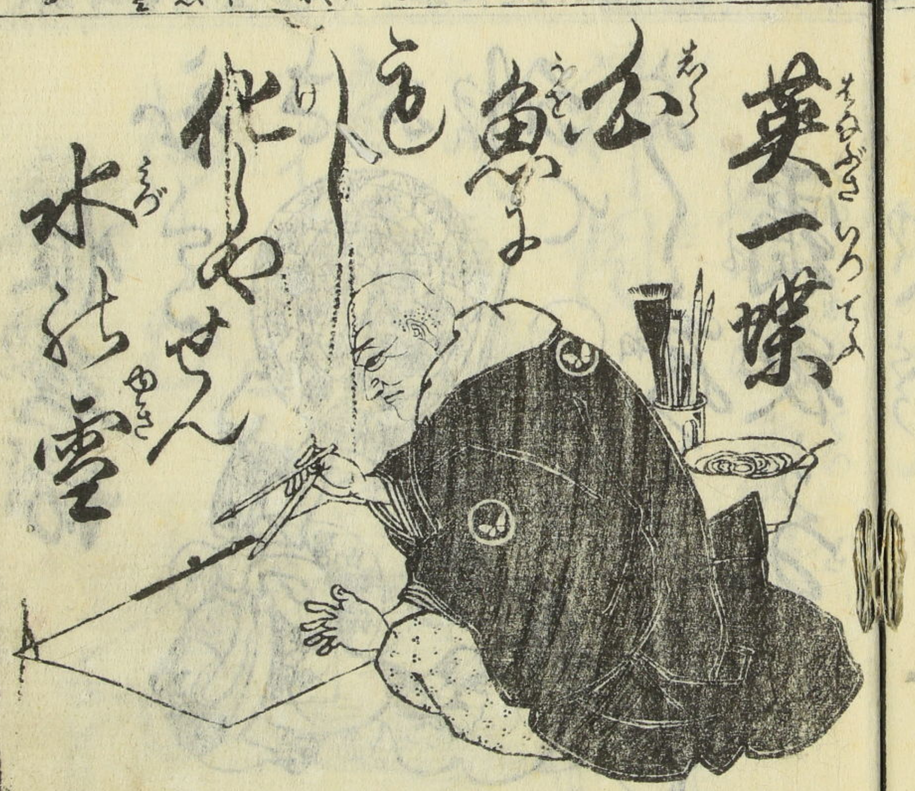
ひざりと
こそ
いづれ
綱代守

舎羅は難波に住て雅と負君
なる人なり若さる物嫁に遊をか
け西鶴を志の花蔬を遊て穏
とも和の物もなく妻と子あれ
と三人朝を曲て枕としたまりとし
て乗む伊勢の郷友に寄らせて
萩芦の友達や此志にしたくさ
又加賀の此枝宮風流を志さひ試
ひ来りに舎羅も家にありてゆめ
くるゝまで郷の抱語志てとかく志て
空抜になれば北枝さへ自何ぞ抜
ふさく抱やなると寄るに答て見
あふ上に貧家に一ひつのめふけなし
宇紙袋に米なりとも焚て来らせん
といふ北枝さぐりて見るに
米二合をかりもあらんといふ
さらば宇米にて四人の口を
養ふべしされど抜ふくるゝ様
来らせたくしといふ
北枝も宇粧を感じぬ

舎羅
蒲乃
穂や
ぶきうつる
軒の法師

一蝶は俗称多賀朝湖俳名を和央
又暁雲といひ芭蕉に学び其角
嵐雪と交り深しある時其角と同
道にて深川に至るに向ふ方揚機
と白の同切りと来るをみて一蝶
たがかけのさらたがかけて来るらん
世をうもの同と思きるまぐ
其角が附こりける宇後一蝶はこれ
まで浅に曲く時其角に彩にのり君
ごりを惜こゝろ時一蝶中は吾物に至
らば魚を殺手物にもる業をせんとか
さいたる魚には必ずらに砂を入れ
されば砂ある手物江戸に来らば我
此世に有と思りなくといひて別たり
其角夫々手物をかふに二年ならく
砂ある手物を買一蝶の存念を思
ひ悦びの寄り親友を喰手抱を上座につき
魚を蒸に茶をすぶも日の時西れ
十二年の後御教にあひ江戸にかへる
享保九年正月十二日死ス

英一蝶
伝
魚
色
化
せん
水
雲



惟然坊はもと美濃国関の者にて
家富る者なりしが貧くなる其
門の俳人にて風狂の人なりある時
翁と共に旅寐せしが木枯の吹きて寒さ
痛みて帯を解て巻て寐ければ
翁見て惟然は案思の者なりと家を
失ひし事を笑ひしことあり発句を
和讃に作り風羅念仏と名づけ
諷ひあるく

まづたのむ椎の木もあり夏木立

寄る年のころに[illegible]
其の娘名古屋の豪家に嫁して
ありしが父の狂ひありくの[illegible]
多くある時町の中で行あひたり娘
は供二三人つれてありしが父をまさに
人に何ともおもはせじとや人目も恥ず
付て泣ければ惟然坊涙ぐみて

両袖にすがり付く時雨かな

宝永七年五月廿七日死去ス

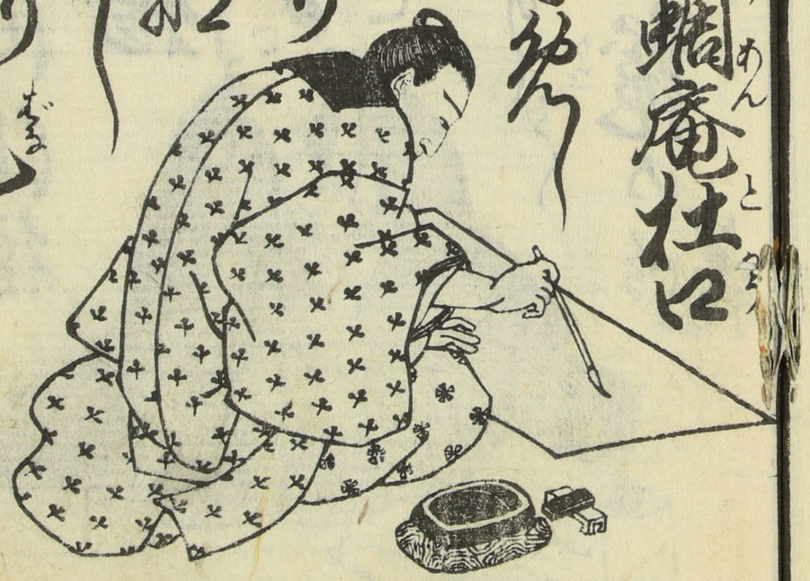
貞佐は桑岡平三郎といひて其角
の門に入る生質律義にして精情
あり子供妻を悦ばずして赤穂の士
多く死しありけるに其の人を流浪
の後四方へ[illegible]書給も貞佐[illegible]
備けるに[illegible]神崎[illegible]郎に逢ひ拙
者のもとに神崎[illegible]数のなるをさりとて
どんぞ入る[illegible]ねば数
貞佐[illegible]て別れしが浅草の湯なり
行しに人々に[illegible]
出し去て[illegible]川へ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
入江大[illegible]
中に[illegible]
としの[illegible]
[illegible]
[illegible]
五極律弟の人なり

その女ハ伊勢山田の産なり和歌をよくし俳諧又佳境に入る一時軒一有が妻となり一有没後江戸にきたり一生物大和を巡り紀行の吟数多ありいせを立宮川にて
色あひも川の水にあふ妻の秋哉
まぜのべて折申く妻の菜摘かな
伊賀紐にて
山松のおくにも詠くも
ねぶさる人まねをそ粉糠
たへまの袖にや(?)
衣更みづからおくれぬ罪深し
法隆寺にて
二またよりそふ蕣の蔓かな
信女の優にやさしき事を求め実にしるべし貞操を守りて俳の雅にも男と肩を並べし誠に和韻と殿に享保十一年四月廿日六十四にて終る深川霊岸寺念仏堂に葬る

糧々庵ハ浮世の者にて其角の門人なり京に住り文雅の道あり
ときに東向の達子の賛に
ちもとむけ頭にやかくまつの餅
布袋の絵に
小袋にたつるひとつ玉むすびて
出るを楽の毎年並和尚を見てていはずして我ある也
應めけの鐵の実にありたる其の死
ときべしと志あされし数々乗し
殊更の法の宗旨をそこに入ぬ
糧々をきけハ和尚答て
おのれの死は雅その人よ
きのふの身がたてもさらぬ様ぞ
糧々庵の
由なめに死しなめに生てぞ糧財
さるにて苦をまける我世より生じ
さらに我かくわる糧を踏破人に
ならてし界をなさるがめて
親がむけハ杖にそのなり庵の基
は出るを出て残ある

紀伊國屋文左衛門は紀州熊野より出て大賓の人に書を乞て大山と号し俳諧は其角の門に入り俳号を千山と称す其角門に入て大に寵愛ありて活氣の性に富て曲淵甚五兵衛などに招かれ千金を投打て名よりとす時の人紀文大尽と称して世に名高き方にまし本所八十間に住し紀文の居宅へ毎日定る客さしも人に入るとかの寄附所へ入るに不残志を尽すべきと世へ出て一つの善行にて名高を残すべし五元集に千とあるは紀文が宅なり紀文が一生の俳諧を集て乾山と いひ後出版といふ紀文正徳の比家衰へて利益なき故門下を落し絶

享保十四己巳年四月 蒲生
恩宅にて乾山を霊祭する
懐中懐紙等悉に葬を催性
融相信士と称号也



紀文

老たりとも
はれこそ
ゆれ
古用千

杜口は花洛の産也其蜩庵と号し生涯俳諧を好こと深かく如をなしう世を辞して北山に隠居せる時人に
かくしひ
くらゐ
ふ
行状雅俗に已にする世に著せるものあり
こう
賢く見聞のひろきあり
ば人集ひて俳諧を事とす
老後耳遠くして人の事ならずのみ
思ひ古書の抜くことを
こゝろ
をかくこと
ほ
恰教積りて二百巻に及ぶ題号を翁草といふ
人々の好こゝろあるを
を借りうつしとめて
拾遺せり年八十五にして
享保二十年二月歿せり
是も近代の一奇人とその
徳を賞せり

喫日のり
風和
しあり花

治徳は水間次郎左衛門とのゝ御師なり
しが万事さとくて寂城侯へ出入
なるとは風虎公露治公の御側へ出
友所と号し宝生流の舞曲に堪
能なれば御座近く戦舞の有をもち
れ又は探題連歌の催しに相手と
なれば常に召れて筆を蒙る露治公
より一ぬかをかゝり治徳さしも日に疎く
に上達し遂に一風を起し俳諧
をもて世に唱る風調
如我城に有るべきのもなれば彼輩が
こゝ猶ぞ相とうく茂を鍋の数
あと相と合せ再び精や夕涼
元日も旅人をとゞる辞なれ
百性のこの浴きうちや桃のむし
人稲書の文あり て糸屋の教字
を矣に加ふること我社もじむ
享保十六年六月晦日六十二にて
世を去る本所本恩寺に葬る

水間治徳
諸物
われど
魚のしゝ
鯛籠の花

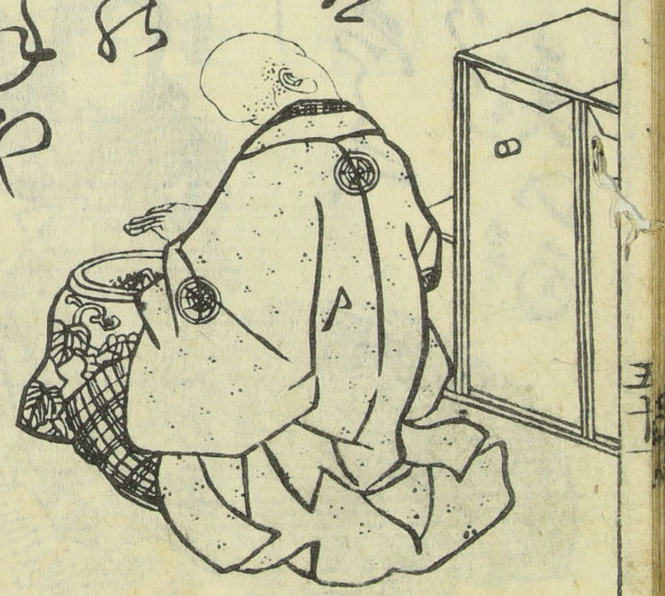
其世川は越前三國荒町屋の妻女と
俳諧に名をうく生風吟
さそふ水あらばしら雲ゝれ
ながらへてもんの知るぬ西れ
ある時江戸の友人何某殿実に投げるに
る有しにて世川にあづまを一見
せんと那なるべしもし[illegible]
なれば屋敷に暫止めゝえんやとのゝ
に心よく請ひきのひぬ生渡宝人に
身をあらなひ百日のいとまをこひ菅
笠卅杖に身をやつし江戸につれの御
中に[illegible]
[illegible]
のよし[illegible]通の記[illegible]
感じて日を[illegible]同列の侯に
語りて世川が[illegible]
[illegible]
の鐵別馬五匹に負せて送りされど[illegible]
を主人に[illegible]
に[illegible]

泊渚川
目を閉し
琴をたべ
ひり
美の面

乙由は呼野山田の社司慶徳圖書と
いひし者にて隠棲を好て人淡く礼人と
ことなりを嫌ひ喪祀の中に庵をのくり
素林舎といふあり同人来りて喪儀を
学ぶことしばしよりをのゝ下愚の者も通ふ
入ざれば手渡あり中にはふ者て心ざし
深切なるはさのこむづかしき祝儀のもの
ゆゑ又言て兵服のもの者さ無礼のこと
起こらんことを恐れ乙由安きことと
なりと祈るゆゑ畑へ出て男いとまげれ
歌をよむけ出くをうく

面性のくるかぶけ出くさむさが
乙由在里せ居へ出く厚おもてなし
接安を体ひ芝居の祝儀せし無せり
さて翌日芝居の祝儀外の客と共
に出て居て乙由方へ菓子をもとめ
来りけるとひらければ
深草やうらふいむらの雁みさく
山路せふ雲にて名なるし

乙由
たてれる
皆
扇れ
れのや
の美
の風



治涼は俳諧四業思の養ふて地名を
以て性とし又を豊経合行尚といふ
治涼東武へ下り一昌が門に入り南紀
に居り世に志ふ一のち義治公
の門に入をうけ一字をいただき治涼
とあらため此時のなり

十分に治ふそ〳〵もけくそ
めとてより三年にして和漢の書を
眼をさらし俳書をあまたよむ
江戸にて俗語をかなで古語を
導ひ素良玉屋を著して俳曲の
惑ひを解きぶれ世人殺ふ拙の始末
にもかゝれば句体ハ
のみこと結一望は基の歌のみ
深立や花のうろこの志の一枝
世も宝に宝は世にありの月
其の雪やぬりく土の消るわど
延享四年十月十四日に歿せ年
八十四故に寺に葬せ

菊岡治涼
人乃
和れ
そく
なり
竹の
ざうり

二川は飛中富山の産にて世々の太守に仕へて武道に心掛深き人なり
蕉門の俳に拘ひて風調移あり
琵琶くと松風吹やひる花
久くほをなれのこしてや蝶の夢
あら何都にのがらんことを思ひ又江湖に俳友をも対せんとんを欲し泥居の殘ひを老をにさ[illegible]ゆるしめ[illegible]て加恩をぬすりひそうに止のゆん斗ひありとても此俗にそれ遐のこと思ひもよらぬと同撃そりこなち入道となる
[illegible]を立さるとて
来くまるく人ゆへ迎て花にあるはなを障子にかきのこし立ちり
太守まもしらるさしをとげ志め外ゆもなく狩志されて殊れそのゆのちり召仕ちるし老後富山所山里と庵を結び生涯深[illegible]に世をるこせしとなん

越ノ二川
手枕
の
枕
室
なし
窓
枕
梅

稲津祇空は渡速の人にて始め青流と号し学び餘り待文を習ひ諸国拝暦のんだて箱根早雲寺にいたり宗祇の墓の前にて誓をきろ入道志て祇空と改め奥羽北飛に行折志て江戸へ出浪し後住居にて
涼ぬくまるあのにどやいく紙にかけ
梅めしきに行く
梅盛りまをしるどの辞もなし
女達ヶの賛に
そもさんかこなさんかと出て
九年ゆに苦思十年前ごろもめ[illegible]の大心神に此りを受のひよく禪意に叶へりとて[illegible]
此人都により業郷に住て散乱と此後難波が江戸へ来る途中箱根湯本にて殁せ享保十八年四月十二日辞世
此世をばぬらりくらりと死ぬるえ
地獄つぶしの極楽とも

祇空
梅
老
も
即中
言
なり

淡々ハ其角が流れを汲て都に のぼり祇園の辺に住し大に富さかり 家居立派に建衣食とも美を好み 美人も及ぬ着物を揃へて用ひ四 方に名あり西國方の侍より文通 対面せんといふ淡々是までの 者に一度逢へば再び其人 に逢まじいとて庭へ出し 遠方より迎へさる人の 名高く通せし 淡々がよく名をつらね 徒の中に名高きの人々に 侍る事流石の事なる 物ハ事ありて なり

代の名に立辞して淡々の名 此るをよみせて淡々と名乗て 教へける事ども淡々ハ 土用八十八才にて辞世

辞世 人に成て画し冨士の山

半時庵淡々

民ハ手を帯にそさむや野がのあと

されハそれ祇園町辺の色を好て芸子 しらず時衣淡く粧ひき美を妻と す 生涯利益を風流をも 好みし我が程の家に足 て花むろ会の医業の術も学 び芸を身に淡々ハ其時の とある淡々に向ひて 内 さて是までのことを考えれバさ くれなゐにかし まで 死での事をかへす一家の者共に おさめけるとの事を思召て たのみまするといふ事を言だる から寄りまいて 先の 身の上の事もありし ア、やふめぬでござりますと言て 笑ひく死にけり淡々もあハれ に思ひ涙にむせび追善供養の たむけ手を合せて向に

死んでも女の恋も 有るぶん筒の中

きた女 袖めしま手みとりつれバもとの糸

不角の松風堂盧雲ともいふ
水墨すこぶる余もこれへ予ねともいふ
けり和歌冠里公の門に鍛冶出仕をいふ
乃相るところの元旦節の門松の時
お雑煮や草かるもおごるけさの春
千年寿冠里公執政職とありせのふ
かへの門松地の里のうるも附
春の松風吹ならくまかれ
とそのれのかのまつについて
歌のそもそもこれかとまりだと
不角元禄の俳諧のうり享保ふ
の俳眼のかり事を通」まちふ
まちふの姫女の筆頭もづら
とそなり味をを持て
けむくとものちへ禅安を敬ふ
後の美意家を見り和歌せり
不角之肉の号を一時
より改之拾之のころ七年もが
九十二歳にて宝暦三六月九辞世
宝婦いなそぶらのかへりり

無村一名夜半亭蕪村とも号す
とものつまよ小松の書を能く俳史
小説ともに眼を通さふふ」
俳諧をもて二尚書を
おくてうらふ業潤猶をるうく
ふ家をまもすふ男人
小説ふ洞い親おふ出一通の
をもて俳のうる
も酒みへたのみて俳吟也
二流の雅者かるやお抱
むの酔てかるやみて一句相よ
ふ句の部家を潤せん寺林
都相をとる」へと樹下の来九か
年寺やかく魅のちり雑の将
又画名を樹亭とい
巻力一冨を紅一世の人の
おろかるり大将事と
対先ぐさよ専ふ風雲ふり

存義は武田家の武士のまゝて
三浦家に仕へ妹聟に家督を
絶せれの迚後仕しく恩遁の身と
なり有無庵と号しその風調
一巻ありて特情録し
弘法のこゝにも一字に山ざくら
忘れし是て風雅つくや小松し
葉かゝ迄の五日の月や梅もち
ご恵よ梅やおのれの葉さへ落るのに
四布五ッ布このかんばのふとんが
近なのふるさゝともねるゝ磯の浪
存義茅場町に住けるゝ此ゝ
まづしく家居もまずらふに薬
て雨ふると此ハ傘さして
俳諧志ゝ是を人仇各
して宝遊の歌るの西八条の
一ッなりと笑ひめれにせり
其後佐口町に居家を移し
頗る富にありて老を書へ

今朝秋と志らで庭に男の姫

存義

三國野風

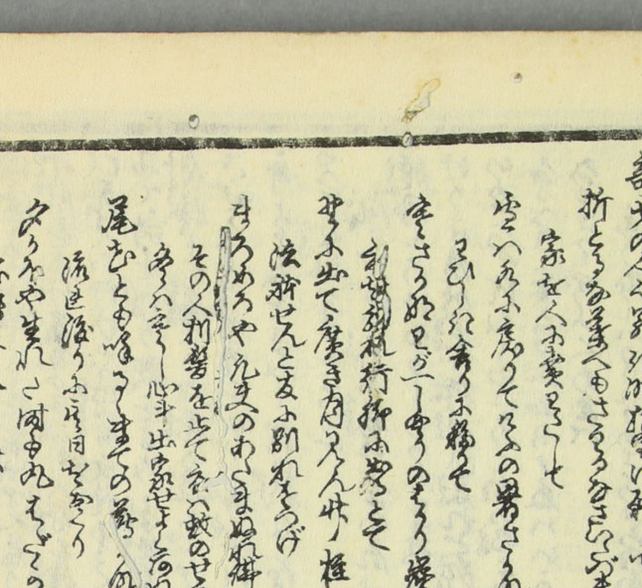
来るくのぞくしらくし

宝楼

蛙井は難波の産物少々俳諧を嗜
奇少の人々其外附近に移りて
折とる事業へもさるるなさいぶま
家を人に賣りてこゝの暑さるれ
まひしに会りに移りて
寒さるれ日が一しきりのまつり候
[illegible]行抑に出るとて
其に出て度き月日人々此ノ柱
法折せんと友に別れをつげ
まろめろや元来のわたまぬれ御
その人利勢を止て衣へ蚊のせへ
多へ衣へし心中出家せよと云れば
尾むとも唯ゆるまでの暮れ
流迷後りに日をかくり
多くやまれと同日丸ぐるの
宝暦二年の秋
のふに咲名へこれまでそ其のむ
[illegible]を謙世よして死せ風流の道
[illegible]といふべし

東々庵蛙井

落葉とれ
あまたら
よすぐん
若ゑばこ



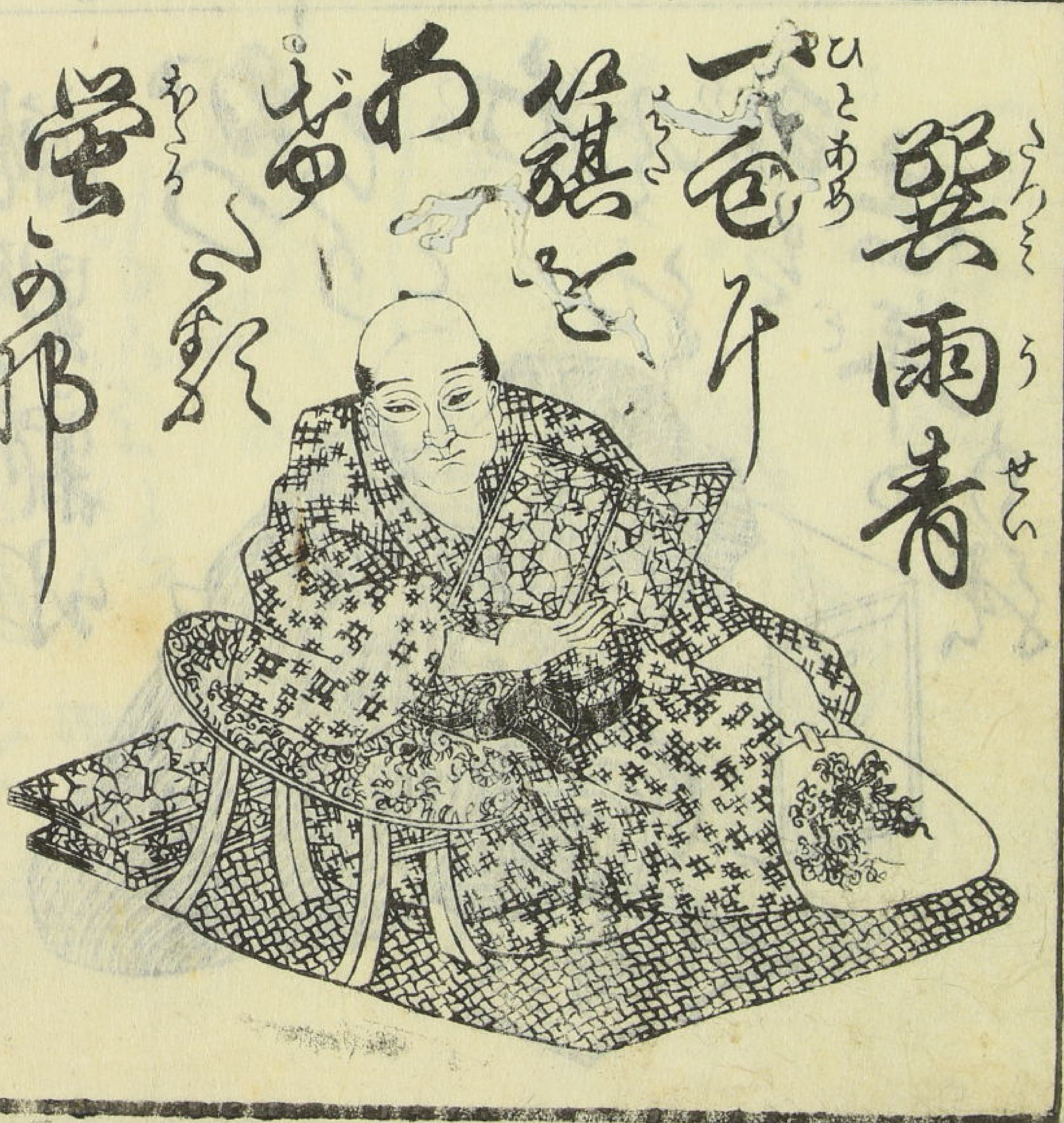
祇徳は[illegible]町辺に住て自在庵と
号せ連歌すて日發句をなせん
に思ふことある時
たるに祇そうや胡蝶のむの家
ある人鳥舞の画の賛をもとめ
五月雨ぬりし徒然もれしが
志ふしきに[illegible]何がしの[illegible]
のいたりに柾里へ入込兵庫屋の
紅[illegible]に遅ひ[illegible]
づけして家にかへらば祇徳の門に
入て俳諧をもんづける者なれば彼が
母来りてさぬぐ此ことをいひて歎れ
ば祇徳が迎ひのものに一封をとこ
ばてく一句を添たり
鶯やあまりにめでてこがれ梅
かの花者此句に感じこゝろをひろ
がへし柾里へかよふことはやみたるとあん
祇徳宝暦四年十月廿六日に歿ろ
柳上村大雲寺に葬せ

祇徳
[illegible]や
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

百井嬉雨

滝野瓢水

雨青ハ浪速の着にて巽何某と
いふ富める者なりしが驕奢甚しく
家産を投打て放蕩なりし故すて
ものずきなりとありし道中の
八辞れつどひ揚かのわいひぐ
笑ひしもの多かりれてつんよ死の様
三度ことなきて難波に知らるゝが
蒹葭堂木村何貝しきりてなを
後其に教諭してうくれわ
須磨城に豊れてうきさえ妻哀ひ
かくて家亡ての住まふ京に移り
てを過著の○○○○て衣服とも
美を好き道なら放縦をさなる
ものげふて妻に琴を弾ずるを考
とし療治ハ心志の○てありてなた
るとれてり是ハ唐土にて蘇合香
を療のいわでふ得る案を
号て蘇合園といへる故事
より思ひよれるよしなり



士朗ハ尾張名古屋京町に住寿亀庵と
号す医術に名高く頗る勢ひさかんなり
毎朝門人に調合をさせ洒掃をへ
別当病に至て病人を数多
称合て無ものふひさ翻く少も
さらに其様を失ふ事なし是つもの
人のためにあらず本居宣長に
学び深く文通する事とあり
士朗大和に行脚えて或父山耳比
山へのぼりと殊ねわるくかの川の雪
さふ本様の音て居しものゝく
樹やきんのうしあこそれにも
きされとかへるけし

このへん身寺山より浅葉様
自賛のる
ある月夜なむ雲府南辞
選花とりてもそし秋月の雲
一字ほし数多かくもちる紅葉
宗鑑周桑世墓ふめの多く
巻を四方に弘む

建涼岱ハ建部なれバ建の一字を用ゆ浅草寺門前ニ住雷神門の風神の袋ニへるがおかしと自ら俳号を涼岱と名のり又國好の歌の筆ニ綾足と称し画名ハ寒葉斎或ハ人著述の本西山物語吉野物語の古体の仮名を用ひて綴れり俳合の自評ニ[illegible]ある職人[illegible]の産ニ[illegible]りて梅の[illegible]これハ加賀の俳役を狩領の礼と[illegible]少年の時侍れし人なれど放蕩ニして古学を業とせんと思ひ又画をもって身を立んと思ひ[illegible]還俗して俳師となり[illegible]理るがよく言るべからざる人なり[illegible]ある者なりといふ年八十で
安永三年三月十八日没ス
牛じま弘福寺ニ葬

也有ハ尾陽の士ニて俳ニ老し文字ニ名あり[illegible]
一 飯ハ三石の程を守るべし
「菜のものころを[illegible]の盛りが
一 汁ハ菜ニ酒の肴ニ[illegible]を過るべし[illegible]
用ひ豆腐ハ[illegible]
[illegible]あり
一 「[illegible]
酒ハ[illegible]
一 「[illegible]
[illegible]
一 薬ハ[illegible]
「[illegible]
一 燈ハ行燈ニて[illegible]べし
「燭ハ[illegible]
右[illegible]
天明三年六月十六日八十二ニて没

大鳴蓼太は空摩居士と称し
雲中菴三世を嗣で此道の氣韻
をくごきに孫磨を以て其風調
ふせもありて送るもなり如ちも
二ツ清ふ聲を淋しげひとつ
埋井や塩ふりし世は苔の露
過れて其月に堪ふて蛍ふれ
[illegible]
白銀の猫をも捨るもの旅
深川芭蕉庵の旧地を慕ひ我寺
要津寺地中に古池の形をうつし
小堂には蕉翁の木像を安置し
同所の奥に地を求めみこゝろ
像を埋て俳塚と称せ斯伝を厚
くし道を守られ[illegible]
[illegible]四時の吟若下に志て生涯の
編集多し天明七年九月七日
歿せ本平集要津寺
俳塚のうしろに葬せ

編者　緑亭川柳
肖像　雄齋國輝
真寫　楓園玄魚
彫工　江川仙太郎

小井居編集
續俳人百家撰
中本一冊
諸名家揮筆

此書は新古の年代をつらぬ前帙にもれたるを拾遺し菊岡沾涼乾什完来白雄宗瑞一茶乙二成美道彦士朗巣兆に[illegible]近ゝは蓼松蒼虬梅室卓池りおのび名吟を撰て正しき實傳をつらへ俳話のありしかたとのことをのせる

嘉永八乙卯歳次孟春發行
東都書房　甘泉堂
芝神明前
和泉屋市兵衛板